

# 広江・浜遺跡 南山 21 号墳

倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告 第 14 集

倉敷埋蔵文化財センター

2011.3

# 序

倉敷市は、平成17年に真備町、船穂町と合併し、354km<sup>2</sup>の広大な市域をもった新倉敷市となりました。新たに加わった真備町は、吉備真備を生み出した古代下道氏の本貫地として知られ、箭田大塚古墳をはじめとする多くの古墳が残されています。また、船穂町には里木貝塚や涼松貝塚など著名な縄文時代の貝塚が知られています。一方、従来の倉敷市域では、瀬戸内海に面した児島地域に旧石器時代の遺跡や製塩遺跡が多く見られ、玉島地域には須恵器の窯跡群が存在しています。このように、新倉敷市では瀬戸内の海岸地域から内陸部に至るまで、豊かな自然環境とともにそれぞれの地域ごとに特色をもった遺跡を見ることが出来ます。

本報告書には、児島地域にある広江・浜遺跡と真備町に位置する南山21号墳の2遺跡を取録いたしました。広江・浜遺跡は、古墳時代の製塩土器が散布する遺跡として古くから知られており、これまでも何度か発掘調査が行われていますが、今回ここに報告いたしますのは、小学校の校舎増築に伴い平成2年に調査を実施した際の成果です。発掘面積は比較的小さなものでしたが、大量の製塩土器を中心に、須恵器や縄文土器などが出土しました。また、1点ではありますが弥生時代の銅鏃が出土しており、かつての調査で発見されている銅戈の破片とともに、この遺跡の性格を考える上で注目されます。

南山21号墳は、倉敷市との合併に伴い、平成18年度から実施している真備町の遺跡分布調査において発見された古墳で、既に土砂採取により墳丘の半分近くを失っていたため、緊急に発掘調査を実施したものです。内部主体の箱式石棺は石材の半分が欠われ、副葬品も鉄剣を含む鉄器5点と少ないものでしたが、すぐ西の尾根には、5世紀末の古墳としては吉備地方最大の前方後円墳である天狗山古墳が位置しており、同古墳の被葬者を考える上では重要な位置を占めると考えられます。

本書が、倉敷市における埋蔵文化財の保護保存の資料として広く活用されますとともに、多くの市民の方に郷土の歴史や文化財に対する理解と認識を深めていただくきっかけとなれば幸いに存じます。

最後になりましたが、現地での発掘調査や報告書の作成にあたりまして、ご理解ご協力を賜りました関係各位に対し、心より感謝申し上げます。

平成23年3月31日

倉敷市教育委員会  
教育長 吉田雄平

# 例 言

1. 本書は、平成2年度に実施した広江・浜遺跡、ならびに平成20年度に実施した南山21号墳の発掘調査報告書である。

2. 各遺跡の調査内容は以下のとおりである。

## 【広江・浜遺跡】

◎所在地 倉敷市広江1丁目9番1号 ◎調査期間 平成2年4月16日～5月31日

◎担当者 倉敷市教育委員会文化課学芸員 小野雅明・谷岡孝久

## 【南山21号墳】

◎所在地 倉敷市真備町川辺2871-1 ◎調査期間 平成20年6月5日～8月5日

◎担当者 倉敷埋蔵文化財センター館長 福本 明 同主任 小野雅明 同学芸員 藤原好二  
(職名等はいずれも調査当時)

3. 本書の執筆は、第1章第1節および第2章第1節を鎌谷守秀、第2章第2・3節は小野、第1章第2節および第3章を藤原が担当し、全体の編集は藤原が行った。

4. 発掘調査における遺構の写真撮影は各担当者が行い、遺物の写真撮影は鎌谷が行った。

5. 出土遺物の整理及び報告書作成は倉敷埋蔵文化財センターで行い、整理にあたっては倉敷埋蔵文化財センター嘱託員 内山智美、同派遣職員 三上加津恵、福岡由貴の協力を得た。

6. 本書の挿図に使用した高度値は海拔高であり、方位はいずれも磁北である。

7. 本書第2・3図に使用した地形図は、国土地理院発行の1/25,000地形図を複製、加筆したものである。

8. 発掘調査で出土した遺物及び実測図・写真等はすべて倉敷埋蔵文化財センターで保管している。

# 目次

## 序

<b>第1章 遺跡の位置と環境</b> .....	1
第1節 広江・浜遺跡.....	1
第2節 南山21号墳.....	3
<b>第2章 広江・浜遺跡の調査</b> .....	7
第1節 調査に至る経緯と経過.....	7
第2節 調査の概要.....	8
1. 調査区の概要.....	8
2. 遺構.....	10
3. 遺物.....	15
第3節 まとめ.....	29
<b>第3章 南山21号墳の調査</b> .....	33
第1節 調査に至る経緯と経過.....	33
第2節 調査の概要.....	35
1. 遺構.....	35
2. 遺物.....	38
第3節 まとめにかえて.....	40

## 挿図目次

第1図	遺跡の位置	1	第20図	包含層出土遺物1 (S=1/4)	22
第2図	周辺の遺跡1 (S=1/25,000)	2	第21図	包含層出土遺物2 (S=1/4)	23
第3図	周辺の遺跡2 (S=1/25,000)	4	第22図	包含層出土遺物3 (S=1/4)	24
第4図	調査地位置図 (S=1/2,000)	7	第23図	包含層出土遺物4 (S=1/4)	25
第5図	古墳時代遺構配置図 (S=1/80)	8	第24図	土錘出土状況図 (S=1/10)	26
第6図	上層断面図 (S=1/80)	9	第25図	包含層出土遺物5 (S=1/4・S=1/2)	27
第7図	土壌1出土遺物 (S=1/4)	10	第26図	包含層出土遺物6 (S=1/2)	28
第8図	土壌実測図 (S=1/30)	11	第27図	包含層出土遺物7 (S=2/3)	28
第9図	土器溜り2検出状況平面図 (S=1/60)	12	第28図	銅鏃 (S=1/2)	29
第10図	カマド・土器溜り2実測図 (S=1/30)	13	第29図	双孔棒状土錘の計測値分布図	31
第11図	カマド実測図 (S=1/30)	14	第30図	南山山塊の古墳分布図 (S=1/5,000)	33
第12図	炉跡実測図 (S=1/20)	14	第31図	墳丘測量図 (S=1/100)	35
第13図	土器溜り1平面図 (S=1/30)	15	第32図	墳丘トレンチ断面図 (S=1/40)	36
第14図	土器溜り1出土遺物1 (S=1/4)	16	第33図	石棺(蓋石除去前) (S=1/30)	37
第15図	土器溜り1出土遺物2 (S=1/4)	17	第34図	石棺断面図(蓋石除去前) (S=1/30)	37
第16図	土器溜り1出土遺物3 (S=1/4)	18	第35図	石棺(蓋石除去後) (S=1/30)	38
第17図	土器溜り2出土遺物1 (S=1/4)	19	第36図	石棺内遺物出土状況 (S=1/10)	38
第18図	土器溜り2出土遺物2 (S=1/4)	20	第37図	副葬品実測図 (S=1/4・1/2)	39
第19図	土器溜り2出土遺物3 (S=1/4)	21			

## 図版目次

図版1	1. 調査地遠景(中央山裾) 2. 調査区全景(東から) 3. カマド支脚残存状況(南から)	図版4	1. 土壌4(左)・土壌5(北から) 2. 土壌6(南から) 3. 土器溜り1須臾器出土状況
図版2	1. カマド支脚残存状況(西から) 2. カマド完掘状況(西から) 3. カマド完掘状況(南から)	図版5	1. 土器溜り1獣骨出土状況 2. 土器溜り2遺物出土状況(南から) 3. 土器溜り2遺物出土状況(西から)
図版3	1. 土壌1(南から) 2. 土壌2(西から) 3. 土壌3(南から)	図版6	1. 包含層土錘出土状況 2. 炉跡検出状況 3. 作業風景

図版7 広江・浜遺跡出土遺物(1)

図版8 広江・浜遺跡出土遺物(2)

図版9 広江・浜遺跡出土遺物(3)

図版10 広江・浜遺跡出土遺物(4)

図版11 広江・浜遺跡出土遺物(5)

図版12 1. 発見時の状況(南から)

2. 古墳遠景(東から)

3. 墓壙中軸断面

図版13 1. 石棺の蓋石

2. 箱式石棺全景(南から)

3. 箱式石棺全景(北から)

図版14 1. 箱式石棺全景(西から)

2. 副葬品出土状況

3. 石棺床断面(北小口付近)

図版15 1. 石棺床断面(南小口付近)

2. トレンチ2南壁

3. トレンチ3北壁

図版16 南山21号墳出土遺物

## 第1章 遺跡の位置と環境

### 第1節 広江・浜遺跡

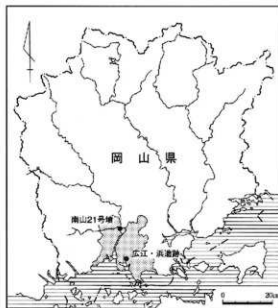
広江・浜遺跡は、倉敷市広江にある市立第三福田小学校の敷地を中心とする、縄文時代から中世にかけての複合遺跡である。昭和33年に刊行された「福田町誌」<sup>(1)</sup>では、師楽式製塩土器が散布する「師楽式遺蹟」として記載されているが、昭和41年、校舎の新築に伴い(財)倉敷考古館が発掘調査を行った際、「広江・浜遺跡」と命名された<sup>(2)</sup>。

遺跡は、東に向けて浅く入り込む谷の入口南側、標高280m程度の鴨ヶ辻山から北西に延びる丘陵先端の山裾に立地する。位置的には倉敷市の中央やや南寄り、「古事記」や「日本書紀」において「児島」あるいは「子洲」と呼ばれた地域の西岸中央付近にあたる。

現在はすぐ西に水島臨海工業地帯が広がるが、この工業地帯は昭和20年代後半からの埋め立てによってその土地が形成されたもので、それ以前は眼前に水島灘が広がっていた。児島が文字どおり海に浮かぶ島となったのは、約6,000年前にそのピークを迎える縄文海進の時であり、したがって、広江・浜遺跡が存続していた縄文時代から中世にいたる何千年もの間、眼前に海を臨む海岸線という遺跡の立地環境は大きく変わることはなかったと思われる。

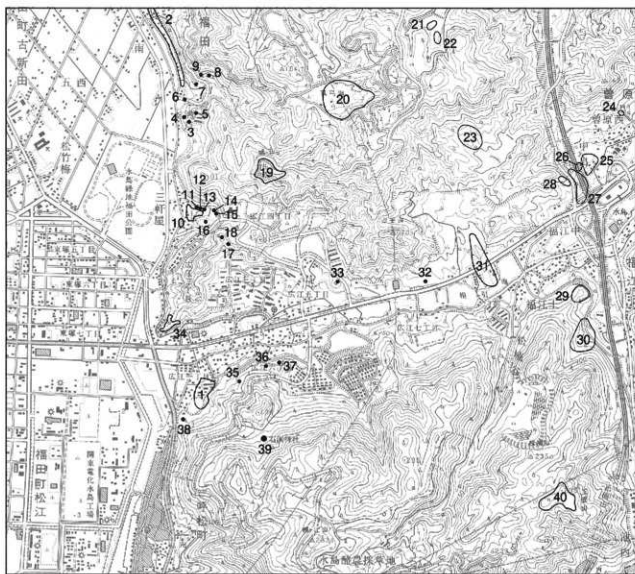
次に、周辺の歴史的環境について、児島を中心に時代順に見ていくと、まず旧石器時代の遺跡としては、真弓池遺跡、西ノ山遺跡、山の鼻遺跡がある。いずれの遺跡もその内容は明らかではないが、サヌカイトの散布状況から、キャンプサイトの性格を有する小規模なものと考えられる。児島西岸にはこのほかにも旧石器時代の遺跡がいくつか認められるが、鷲羽山遺跡や香川県榎石島遺跡など、瀬戸内沿岸部である児島の南岸や瀬戸内の島々に存在する遺跡に比べれば、立地に大きな違いはないものの、その規模の差は歴然である。

縄文海進がピークを迎えた縄文時代前期以降、児島は完全に海中の島となったが、入り組んだ地形を呈する沿岸部では砂州や河岸段丘が発達し、そうした場所に繁殖する魚貝類を求めて縄文人が居住するようになる。特に児島の北西端を中心とする地域には、福田貝塚、磯の森貝塚、船元貝塚、羽島貝塚など、著名な貝塚が数多く存在し、西日本有数の縄文貝塚密集地帯を形成している。一方、貝塚を伴わない縄文遺跡としては、この広江・浜遺跡をはじめ三軒屋遺跡や溝落遺跡<sup>(3)</sup>、宇野津遺跡などがあるが、いずれも浅い谷が開けた出口付近に位置している。また、児島西岸から南岸にかけても同様の立地を有する縄文遺跡が点在しているが、そのほとんどが旧海岸線に位置しており、貝塚は伴わないものの、海の幸に大きく依存していた縄文人の生活環境が想定できる。



第1図 遺跡の位置

弥生時代に入ると、倉敷市の北東部あたりでは河川の沖積作用により徐々に陸地化が進み、平地に水田が作られ始める。しかしながら、そうした沖積化が及ばなかった児島においては安定した陸地が形成されなかったため、まず人々が居住地として選んだのは、背後に低丘陵をひかえた浅い谷の出口付近で、海岸線に面した場所であった。それは広江・浜遺跡や福田貝塚、阿津走出遺跡<sup>(4)</sup>など、縄文時代の遺跡と重なる立地をもつ場合が多い。したがって、弥生時代前期における遺跡の数は縄文時代のそれと大きく変わることはなかったが、中期になると一気にその数を増やすことになる。これらの



- |              |             |           |            |           |
|--------------|-------------|-----------|------------|-----------|
| 1 広江・浜遺跡     | 2 湾戸遺跡      | 3 湾戸1号墳   | 4 湾戸2号墳    | 5 湾戸3号墳   |
| 6 湾戸4号墳      | 7 湾戸5号墳     | 8 湾戸6号墳   | 9 湾戸7号墳    | 10 三軒屋遺跡  |
| 11 三軒屋1号墳    | 12 三軒屋2号墳   | 13 三軒屋3号墳 | 14 三軒屋4号墳  | 15 三軒屋5号墳 |
| 16 三軒屋6号墳    | 17 広江北1号墳   | 18 広江北2号墳 | 19 川越山城跡   | 20 真弓池遺跡  |
| 21 一尺谷上池遺跡   | 22 一尺谷上池東遺跡 | 23 曾原窯跡群  | 24 清田八幡宮遺跡 | 25 茶津池南遺跡 |
| 26 曾原天王山中世墓群 | 27 曾原西遺跡    | 28 西ノ山遺跡  | 29 前山遺跡    | 30 瓶焼谷窯跡群 |
| 31 相引池遺跡     | 32 澤池北古墳    | 33 広江東古墳  | 34 山の鼻遺跡   | 35 広江南1号墳 |
| 36 広江南2号墳    | 37 広江南3号墳   | 38 広江浜南古墳 | 39 釈塔遺跡    | 40 正面山廃寺  |

第2図 周辺の遺跡1 (S=1/25,000)



遺跡は、いずれも狭小な平地しかのぞめない谷間に位置しており、遺跡の規模も小さいという特徴がある。安定した平地が少なかった児島には、こうした中期の小規模な遺跡が特に多く存在しており、前山遺跡や菰池遺跡<sup>(6)</sup>、仁伍遺跡<sup>(6)</sup>など、中期の標式土器名が付けられた遺跡も知られている。また、池尻遺跡<sup>(7)</sup>や菰池オレントウ遺跡<sup>(8)</sup>など、弥生時代で最も古い中期の製塩土器を出土する遺跡が児島の限られた地域にいくつか存在しており、土器製塩の始まりを考えるうえで注目される。弥生時代の後期になると、倉敷地域の北部から北東部にかけて、いち早く沖積化が進んでいた地域では、上東遺跡<sup>(9)</sup>や酒津遺跡などの大きな集落が姿を現す一方、中期に数多く成立した小規模遺跡の多くは後期まで存続することはなかった。これは、児島の遺跡に典型的な小さな谷あいの平地では、増加する人口を支えるだけの米を収穫することができなくなり、より広い可耕地を求めて人々が居住の場を移した結果だと考えられている。

古墳時代の児島を特徴付けるものとして、製塩遺跡の存在がある。児島の限られた地域では、すでに弥生時代中期から土器製塩が行われていたことは先に述べたが、古墳時代後期になると、児島の西岸や南岸の、砂洲が存在したと思われる当時の海岸線ではほぼ例外なく製塩が行われるようになる。広江・浜遺跡や湾戸遺跡、塩生遺跡などは西岸の、阿津走出遺跡や大室遺跡などは南岸の例である。また、備前瀬戸に浮かぶ島々のほとんどの浜にも同時期の製塩遺跡が確認されており、塩の生産地として有名な古代吉備の中でも、児島周辺がその中心的地域であったことが窺える。これらの遺跡からはおびただしい量の製塩土器が出土することが多く、一年のうち少なくとも一定の期間は製塩が行われていたと思われる。こうした製塩集団の生活痕跡については、児島ではほとんど明らかになっていないが、製塩遺跡の背後の丘陵には数基の古墳が存在することがあり、製塩集団との係わりが考えられる。湾戸遺跡と湾戸古墳群や三軒屋遺跡と三軒屋古墳群はその例であり、また、広江・浜遺跡の背後に位置する広江南古墳群や広江浜南古墳も、同様の性格を有する古墳と思われる。

古墳時代後期に隆盛した製塩は、古代から中世にかけても引き続き行われたが、奈良時代以降、土器製塩から鉄釜による製塩へと変化していったこともあり、遺跡として確認されることは少ない。そうした中で、平成5年に倉敷市教育委員会が実施したマンション建設に伴う塩生遺跡の発掘調査では、2基の鹹水溜土壌と1基の炉跡が検出されており<sup>(10)</sup>、中世における製塩作業の一部が明らかになった。周辺に存在する奈良時代以降の遺跡としては、山岳寺院跡である正面山庵寺や中世の山城である川越山城跡などがあるが、いずれも調査等は行われておらず、詳しい内容は不明である。また、児島周辺の平地に存在する中世散布地のほとんどは現在の集落と重なっており、発掘調査例も乏しいため、遺跡のうえからは当時の人々の生活を復元する材料が極めて少ないというのが現状である。

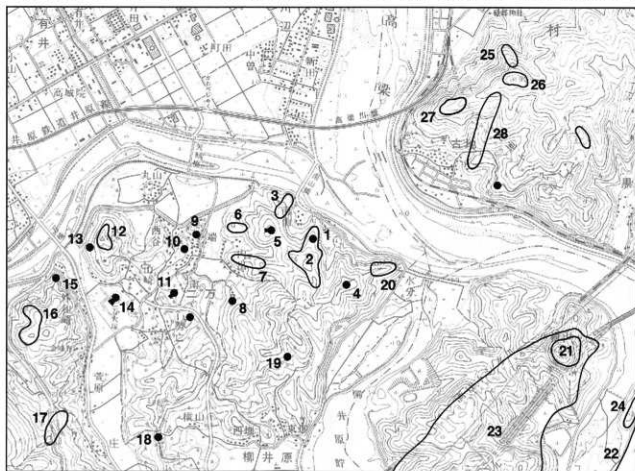
## 第2節 南山21号墳

岡山県西部の備前地域を貫流する高梁川が、総社市井尻野・秦付近で山間部から平野部に抜け出ると、東岸には古代吉備の中核地として栄えた総社平野が広がる。一方、西岸の新本川流域の地域および小山川流域の倉敷市真備地区にも多くの遺跡が存在している。さらに南流する高梁川は、広島県の神石高原を水源とする小田川と合流している。南山21号墳は、この合流点を望む標高105m程の山頂から尾根上にかけて形成された三十基程から成る南山古墳群のひとつである。この尾根を含む周囲の

山上には、5世紀後葉の大形帆立貝式前方後円墳である天狗山古墳をはじめ、南山古墳群・南山北古墳群などが集中している。高梁川と小田川の合流点の南では、東から福山山塊、西からは遙照山・弥高山山塊の支尾根がせまる隘路が形成され、さらにすぐ南の酒津八幡山山塊によって、高梁川は東西二つの流れに分離される。八幡山の南側で瀬戸内海に達した東西高梁川は、その運んできた土砂によって沖積地を形成しつつあり、そこには酒津遺跡・水江遺跡が存在する。総社平野と瀬戸内海を結ぶ高梁川という河川交通の要衝を望む立地は、南山21号墳ひいては南山古墳群の歴史的位置づけを考えると上で重要な要素と言えるだろう。

高梁川・小田川合流点付近においては、これまでのところ旧石器時代・縄文時代の明確な遺跡は知られていない。わずかに下流の酒津遺跡で表面採集されたと思われる遺物のなかに、ナイフ形石器・中津式土器破片が認められるのみである<sup>(11)</sup>。

弥生時代の遺跡としては、高梁川・小田川の合流点と高梁川河口の両方を見渡すことのできる酒津八幡山遺跡、そしてその麓に立地する酒津遺跡があげられる。酒津八幡山遺跡からは弥生中期後半の



- |          |             |            |               |          |
|----------|-------------|------------|---------------|----------|
| 1 南山21号墳 | 7 内出古墳群     | 13 山崎1号墳   | 19 越田奥古墳      | 25 王子古墳群 |
| 2 南山古墳群  | 8 下二万神社裏山古墳 | 14 二万大塚古墳  | 20 南山城跡       | 26 輕部山城跡 |
| 3 南山北古墳群 | 9 笠の坑古墳     | 15 外和崎古墳   | 21 酒津八幡山遺跡・城跡 | 27 輕部城跡  |
| 4 南山東古墳  | 10 経坑古墳     | 16 大谷大塚古墳群 | 22 酒津遺跡       | 28 古地古墳群 |
| 5 天狗山古墳  | 11 勝負砂古墳    | 17 笠原古墳群   | 23 酒津山古墳群     |          |
| 6 小坑古墳群  | 12 山崎遺跡     | 18 経塚古墳    | 24 酒津妙見山古墳群   |          |

第3図 周辺の遺跡2 (S=1/25,000)

土器片やサヌカイトが採集されている<sup>(102)</sup>。その東南に位置する酒津遺跡は、高梁川によって形成された沖積平野に立地しており、弥生時代中期に始まる集落遺跡である。酒津八幡山遺跡は、この酒津遺跡の背後で見張り場的な役割を持った遺跡ではないかとする意見もある。なお、酒津遺跡は弥生末から古墳初頭とされる酒津式土器の標式遺跡でもある<sup>(103)</sup>。

小田川の南岸では、南山古墳群の西方にあたる二万地区においても、岡山大学による勝負砂古墳の調査時に弥生時代後期の土器片などが出土しており、周辺に弥生時代の遺跡の存在がうかがえる<sup>(104)</sup>。また、南山古墳群の南東の尾根上に単独で立地する南山東古墳は、一辺10m程の低平な墳丘を持ち、弥生墳丘墓の可能性がある。

古墳時代においては中期末から後期初頭の前方後円墳が集中する地域として注目され、岡山大学による継続的な発掘調査が実施された。天狗山古墳は高梁川と小田川の合流点を見下ろす山頂に築かれた墳丘長60mの前方後円墳である。戦前に乱掘を受け、鏡・埴輪・刀剣・鉄鏃・馬具・農具などが出土した。これらの副葬品は現在東京国立博物館に収められている<sup>(105)</sup>。岡山大学によって墳丘・竪穴式石室が再調査され、また、新たに出土した須恵器などから5世紀末の築造と推定されている<sup>(106)</sup>。

この天狗山古墳の周囲には、南山北古墳群・南山古墳群などの群集墳があり、そのうちの1基が南山21号墳である。21号墳は標高は70m程の北向きの尾根に立地し、やはり高梁川と小田川の合流点を見下ろすことができる。同じ尾根上には、21号墳より南側上方に5基の古墳が存在し、北側下方には土砂採取などで破壊されたものも含めると5基以上の古墳が存在した可能性が考えられる。また、さらに尾根を南に登った山頂部にも10基以上の小古墳が群集している。これらの古墳は天狗山古墳の被葬者像を考える上で重要な位置づけを持つものと考えられる。

勝負砂古墳は天狗山古墳の西側にある小さな谷の奥に立地している。古墳から総社市の鬼ノ城を見ることができるが、作山古墳や国分寺などのある平野部を望むことはできない。岡山大学の調査によって未盗掘の古墳であることが判明し、話題となった。墳長約38mの帆立貝式の前方後円墳で、地表下3m以上の深さに構築された竪穴式石室から、鏡・埴輪・刀剣・鉄鏃・馬具などが出土した。築造時期は天狗山古墳と同じく5世紀末と推定されている<sup>(107)</sup>。

6世紀半ばにはさらに少し西の谷筋に墳丘長38mの二万大塚古墳が築かれる。竪穴式石室からは鏡・馬具・刀剣・須恵器が出土している。岡山市千足古墳を除けば、吉備地域で最初に竪穴式石室を導入した前方後円墳である<sup>(108)</sup>。

6世紀後半以降、古墳築造の中心は小田川北岸に遷り、箭山大塚古墳が築かれる。径46mの円墳で、全長19.1mの巨大な竪穴式石室には3基の組合式石棺があり、金環・馬具・須恵器などが出土している<sup>(109)</sup>。

飛鳥・白鳳時代には、小田川をやや遡った位置に箭田廃寺<sup>(110)</sup>・八高廃寺・岡田廃寺が造営され、古代寺院の集中する地域としても注目される<sup>(111)</sup>。後の吉備真備輩出につながる下道氏の本貫地が形作られてきた様子が見て取れる。奈良時代になると、小田川の北側に古代山陽道が整備されたと推定される。南山21号墳の所在する真備町川辺には、川辺駅家が設けられたとされるがその位置は確認されていない<sup>(112)</sup>。

中世末から近世初頭には、河川交通の要衝であるこの地域にも多くの城が築かれている。高梁川と

小田川の合流点のすぐ西岸の尾根には、堅堀を幾筋も備えた南山城跡が立地する<sup>(20)</sup>。対岸の総社市清音古地の尾根上には軽部山城跡・軽部城跡が認められる。本能寺の変の後、豊臣秀吉の天下統一が進められると、高梁川は西の毛利家と東の宇喜多家の国境となる。酒津八幡山城は東高梁川の西岸に立地し、山陽道方面と阿知の海の両方を望むことができる。備中兵乱記<sup>(21)</sup>にも登場し、戦国時代には高橋玄蕃が在城したと伝えられるが、堅堀のほかに折れを伴った石積が認められることから、この時期に境目の城として改修された可能性がある。

註

- (1) 『福田町誌』福田町誌編集委員会 1958
- (2) 岡壁忠彦ほか「広江・浜遺跡」『倉敷考古館研究集報第14号』（財）倉敷考古館 1979
- (3) 『倉敷埋蔵文化財センター年報11』倉敷埋蔵文化財センター 2008
- (4) 下澤公明ほか『本州四国連絡橋陸上ルート建設に伴う発掘調査Ⅱ』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告71 岡山県教育委員会 1988
- (5) 註(4)と同じ
- (6) 山本慶一「倉敷市仁伍遺跡」『倉敷考古館研究集報第8号』（財）倉敷考古館 1973
- (7) 鍵谷守秀ほか「池尻遺跡」倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告第6集 倉敷埋蔵文化財センター 1997
- (8) 註(4)と同じ
- (9) 『山陽新幹線建設に伴う調査Ⅱ(岡山以西)』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告第2集 岡山県教育委員会 1974  
【川入・上東】岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16 岡山県教育委員会 1977  
【上東遺跡】岡山県埋蔵文化財発掘調査報告158 岡山県教育委員会 2001
- (10) 『倉敷埋蔵文化財センター年報1』倉敷埋蔵文化財センター 1994
- (11) 酒津遺跡採集のナイフ形石器・中津式土器片は倉敷埋蔵文化財センターで保管している。
- (12) 岡壁忠彦・岡壁霞子「第四章 弥生時代 第二節 弥生人の生業」『新修倉敷市史 第一巻 考古』倉敷市 1996
- (13) 岡壁霞子「酒津・水江遺跡」『倉敷考古館研究集報第8号』（財）倉敷考古館 1973
- (14) 松木武彦編『未掘古墳の発掘調査 勝負砂古墳第5次発掘調査概報』岡山大学文学部プロジェクト研究成果報告書第7冊 2008
- (15) 村井崑雄「岡山県天狗山古墳出土の遺物」『MUSEUM 250号1 東京国立博物館 1966
- (16) 松木武彦「吉備における「雄略朝」期の考古学的研究」科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書 2001
- (17) 松木武彦ほか「勝負砂古墳 調査概報」(株)学生社 2009
- (18) 新納泉・寺村裕史「二万大塚古墳」岡山大学考古学研究室 2005
- (19) 中野雅美「箭田大塚古墳」真備町教育委員会 1984
- (20) 葛原克人「箭田廃寺」『岡山県史 考古資料』岡山県史編纂委員会 1986
- (21) 澁哲夫・亀田修一「吉備の古代寺院」吉備考古ライブラリ13 (株)吉備人出版 2006
- (22) 大橋雅也「備前・備中における古代山陽道と駅家」『考古学研究会例会シンポジウム記録5 畿内弥生社会像の再検討・「雄略朝」期と古備地域・古代山陽道をめぐる諸問題』考古学研究会 2006
- (23) 小川文好「備中南山城についての一考察」『中世城郭研究 第14号』中世城郭研究会 2000
- (24) 加原耕作編著『新撰備中兵乱記』(株)山陽新聞社 1987

参考文献

『新修倉敷市史 第一巻 考古』倉敷市 1996

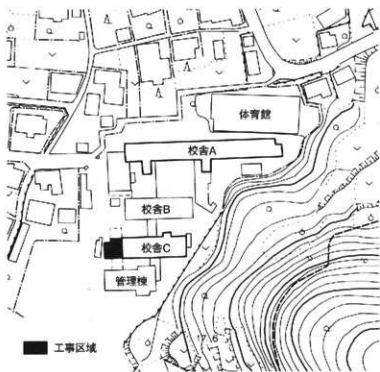
## 第2章 広江・浜遺跡の調査

### 第1節 調査に至る経緯と経過

倉敷市立第三福田小学校は、水島臨海工業地帯の完成により周辺の人口が急増したことに対応するため、昭和41年、呼松地区から現在の広江地区に新築移転された。移転当時は校舎Aと管理棟のみが建てられていたが、増え続ける生徒数に対応するため、まず、昭和46年に体育館が新築され、続いて昭和50年には校舎Bが、昭和54年には校舎Cがそれぞれ増築された。

こうした中、管理棟の玄関部分を校舎Cの西側に隣接して建設する大規模改造工事の計画が、平成元年度に教育委員会施設課から提出され、工事区域内に存在する広江・浜遺跡の取り扱いについての協議が行われた。今回の増築部分については、校舎Cの建設に伴う発掘調査で縄文時代から中世にかけての遺構・遺物が出土していることから、同様の状況である可能性が高いと判断された。しかしながら、建築物が小学校という公共性の高いものであり、他の場所に玄関部分を移すことは非常に困難であることから、やむを得ず当該部分について全面発掘調査を行い記録保存とすることになった。

発掘調査は、平成2年4月16日から5月31日にかけて実施した。調査は建設予定区域全体を対象としたが、浄化槽部分や校舎Cに伴う調査の際すでに発掘が行われた部分も含まれていたため、この部分については対象外とした。当初の予定では、重機により厚さ50～60cmの造成土を除去した後、遺物包含層の掘り下げを行う計画であったが、表土下30cm程度で、使用中の上下水道管やガス管が何本も調査区を南北方向に縦断していることが判明したため、そこより下は人力によって掘らざるを得なかった。その結果、造成土を除去し包含層の上面を検出するまでに、約1週間を要した。また、遺物包含層は砂質であるため、掘り下げ作業自体は比較的容易であったが、前述した上下水道管等の存在により土の持ち出しには苦勞を伴った。こうした状況の下、遺物包含層の掘り下げを行った結果、遺構としては古墳時代後期の土塼6基、土器溜り2か所、カマド1基、炉跡1基を検出し、遺物としては同時代の製塩土器を中心として土師器や須恵器、少量ではあるが縄文土器や古代から中世にかけての土器が出土した。また、造成土中から、弥生時代の銅鏝1点が出土した。

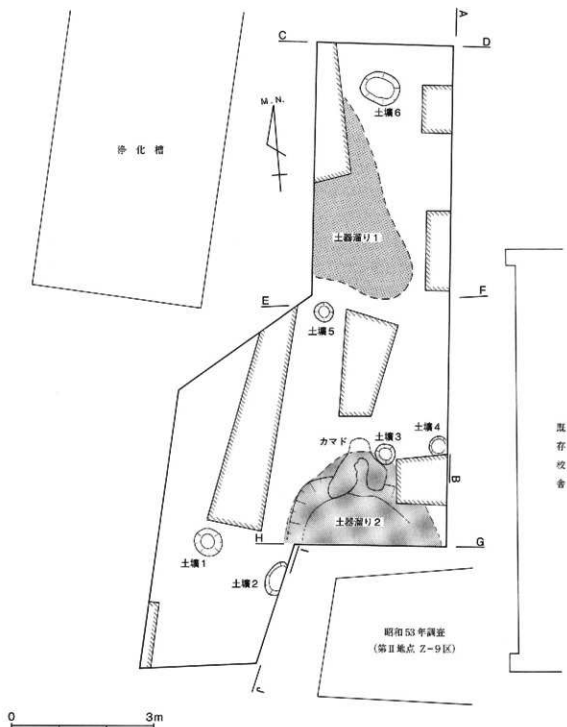


第4図 調査地位置図 (S=1/2,000)

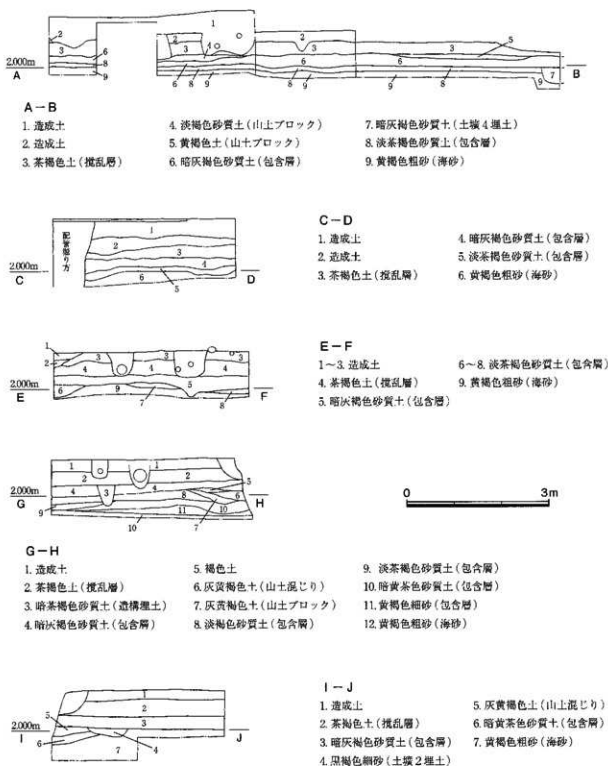
## 第2節 調査の概要

### 1. 調査区の概要

今回報告する発掘調査の原因は倉敷市立第三福田同小学校の校舎増築であり、調査地点は第4図における校舎Cすなわち1978年に行われた2次調査の第II地点西隣にあたる。工事計画区域の北西に浄化槽、南東には2次調査Z-9区があるため、調査区はいびつな形となった。また、発掘調査を進めて



第5図 古墳時代遺構配置図 (S=1/80)



第6図 土層断面図 (S=1/80)

いく過程で大きな障害となったのが調査区の中を南北に埋設された多数の配管(上下水道、ガス、水道、電気配線等)である。これらは、掘り下げが進むと宙に浮いた状態となり、遺構の検出、土層断面観察、実測、写真撮影など多くの作業に支障が生じることとなった。時には上水道管が破裂して調査区が水

没するという災難にも見舞われたこともあった。第5図に示す発掘調査区平面図の中で掘り残しがあるのは、使用中の配管類や排水柵の現状維持を優先させたためである。

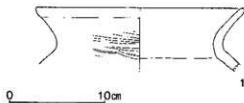
調査区の基本的な層序については、第6図のとおりである。最上層は造成土で、その下に攪乱を受けた茶褐色土が見られる。おそらくこの層までが先の校舎建築工事による整地層と思われ、細片となった遺物が含まれる。その造成土から銅鏝1点が出土した。茶褐色土の下からは厚さ20～30cmの暗灰褐色砂質土が地表下約80cmの標高2.3m付近で見れる。その直下には厚さ10cm程度の淡茶褐色砂質土が堆積しており、これら二つの層を一括して遺物包含層と認識した。包含層からの出土遺物の大半は古墳時代後期のもので、なかでも製塩土器が圧倒的に多い。縄文晩期、弥生後期の遺物は少量しか出土せず、古墳時代後期以降の遺物は断片がごくわずかである。暗灰褐色砂質土からは釘跡1基が検出され、双孔棒状土錘17点が集中した状態で出土したことなどから、この層が堆積した段階で、古墳時代後期の活動痕跡がいくらか残されていると考えられる。淡茶褐色砂質土の下は黄褐色粗砂の海砂層が存在し、この層にもわずかながら古墳時代後期までの遺物等が含まれる。以上が基本層序の概要であるが、調査区南東の土層断面図(G-Hライン)が示すようにこの付近では暗灰褐色砂質土の下から製塩土器などを廃棄した土層が見つかり、造り付けのカマドが検出されるなど複雑な堆積状況が認められた。しかし、調査区南東隅の東壁付近の様子については配管が集中しているため、十分な観察や記録ができなかったのは残念である。

## 2. 遺構

検出された遺構については、土壇6基、カマド1基、釘跡1基、土器溜り2か所がある。時期についてはいずれも古墳時代後期と考えられる。

### 土壇 1

調査区南西で検出された。平面形はほぼ円形で、断面形はすり鉢状を呈する。検出面での直径約70cm、深さ約20cm。黄褐色粗砂の海砂層を掘り込み、埋土は暗灰褐色砂質土である。土壇内から粗製土器器甕、須恵器蓋杯、製塩土器、双孔棒状土錘が少量出土した。他の土壇と比べて出土遺物の保存状態が良いとはいえないが、図化できるものは1点ある。1は粗製土器器甕の口縁部である。体部には平行タタキが施される。焼け歪みがあり、色調、焼成は製塩土器に似る。



第7図 土壇1出土遺物 (S=1/4)

土壇1の2m東の壁沿いで西半分が検出された。平面形は不整形円形で、底面に凹凸がある。検出面での長径約90cm、深さ最大で18cm。黄褐色粗砂の海砂層を掘り込み、埋土は黒褐色細砂である。土壇内から縄文晩期土器、須恵器、製塩土器、双孔棒状土錘の細片が少量出土した。

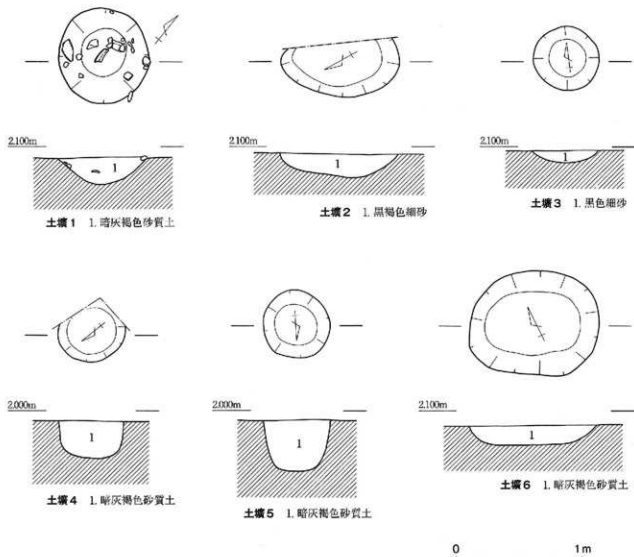
### 土壇 2

土壇1の2m東の壁沿いで西半分が検出された。平面形は不整形円形で、底面に凹凸がある。検出面での長径約90cm、深さ最大で18cm。黄褐色粗砂の海砂層を掘り込み、埋土は黒褐色細砂である。土壇内から縄文晩期土器、須恵器、製塩土器、双孔棒状土錘の細片が少量出土した。

### 土壇 3

調査区南東のカマドに接近して検出された。平面形はほぼ円形で、検出面での直径約50cm、深さ約10cm。黄褐色粗砂の海砂層を掘り込み、埋土は黒褐色細砂である。土器溜り2に先行すると考えられる。遺物は出土していない。





第8図 土壌実測図 (S=1/30)

**土壌4**

土壌3の1.5m東の壁沿いで検出された。平面形は不正円形で、壁の立ち上がりはほぼ垂直である。検出面での直径約53cm、深さ約30cm。黄褐色粗砂の海砂層を掘り込み、埋土は暗灰褐色砂質土である。土壌内から須恵器蓋杯、製塩土器が少量出土した。

**土壌5**

調査区中央の西寄り検出された。平面形はほぼ円形で、壁の立ち上がりは垂直に近い。検出面での直径約50cm、深さ約40cm。黄褐色粗砂の海砂層を掘り込み、埋土は暗灰褐色砂質土である。土壌内から須恵器蓋杯、製塩土器が少量出土した。

**土壌6**

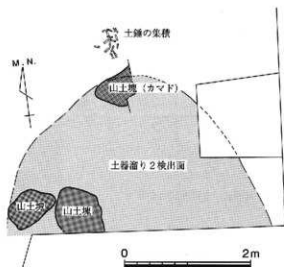
調査区北端で検出された。平面形は不整楕円形で、検出面での長径約100cm、短径約80cm、深さ約15cm。黄褐色粗砂の海砂層を掘り込み、埋土は暗灰褐色砂質土である。土壌内から須恵器の蓋杯、高杯、土師器、製塩土器が出土したがいずれも細片である。

### カマドの検出状況

調査区南東で発見されたカマドの検出状況について記述する。調査区南東ではコンクリート製排水管が南北に延びているので、その継ぎ目部分の支えとして土柱状に掘り残し、その周囲の掘り下げを行っていた。そして最初に、製塩土器等が窪みの中に堆積した土器溜り2が検出され、その記録作業の後、遺物の取り上げを行っている最中に発見の端緒をつかんだ。土器溜り2の検出時に土柱付近で確認されていた山土の塊が一定範囲で広がるのが判明し、土柱を下から上へと逆方向に掘り進めた結果、造り付けカマドとなって現れたのである。土柱の中に隠れた状態であったため存在の確認が土器溜り2よりも後になったこと、土柱を整形する際に右袖部分を少し削っており、もし煙道がよく残っていたならばそれも切断している可能性があることを明記する。発見当初、土器溜り2と関連付けてこのカマドが製塩作業の工程に係わる遺構である可能性も考えたが、倉敷考古館の間壁忠彦・葦子両氏に現地指導を仰いだところ、一般の生活に使用されたものであるとの見解を示され、この遺構と土器溜り2に対する解釈が定まったことも併記しておきたい。

### カマド

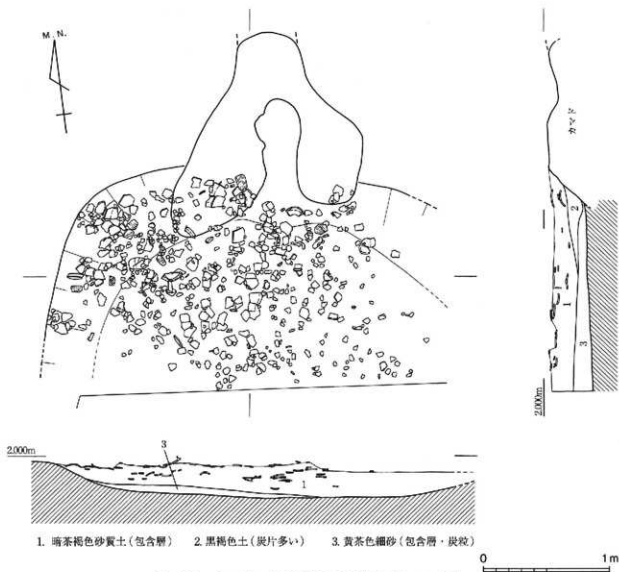
今回の調査で検出されたのは、通常竪穴式住居の壁沿いに築かれる、いわゆる造り付けカマドである。焚き口前面に一辺5m程度で復元できる隅丸方形の竪穴状遺構があり、竪穴式住居の北辺にカマドを掘り付けたものと考えるのが最も合理的であるように思われ、努めて精査したが、調査区壁面(G-H、I-J)でも確証は得られず、柱穴も検出されなかった。竪穴状遺構はカマドの袖部に近い場所では確認できるが、周辺ではその存在が疑われるほどあいまいである。また、配管が集中する東辺部分の状況が把握できないことも重なり、判断の難しい状況であった。地盤の不安定な砂州上に建てられた竪穴住居の残骸



第9図 土器溜り2検出状況平面図  
(S=1/60)

はこのようなものかもしれない。しかし、製塩作業の従事者が日常の生活とは別に、作業場に近しい場所に構えて一定期間利用したことも考えられるので、小屋掛け程度の簡素な建物も想定できよう。その場合、竪穴状遺構は焚き口前面の作業面ということになる。以上のことから建物本体については保留し、カマドのみについて記述する。

カマドは上記のとおり掘り下げの際に周辺を少し破損しているが、保存状態は良好である。黄褐色粗砂の海砂の上に直接構築されており、粘土材として黄灰色の山土を使用している。焚き口の両袖部には製塩土器片が補強材として埋め込まれていた。この部分の天井部は失われているが、袖部から連続して同様の補強がなされていたと推測される。煙道と右袖の据はおそらく調査中に破損していると思われる。外形の復元幅は180cm、煙道を含めた残存長は155cm、内法については、燃焼部幅85cm、奥行き90cm、高さ30cm程度、煙道の幅20cm、残存長は40cm程度である。また、焚き口の幅は32cm。掛け口は主軸方向に長い楕円形を呈し、長径が推定45cm、短径は35cmを測る。焚き口付近の床面の他、

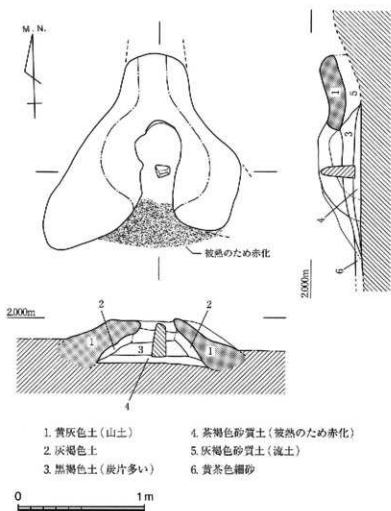


第10図 カマド・土器溜り2実測図 (S=1/30)

掛け口周囲の天井部外面も被熱のため赤く変色していた。内部の状況については、茶褐色砂質土を床面とし、その上に炭片を多く含む黒褐色土が堆積していた。また、内壁を覆うようにして厚さ5～8 cmの不純物の少ない灰褐色土が見られたが、隙間に流れ込んだものであろうか。堆積の理由はわからない。黒褐色土の上は土器溜り2の暗黄茶色砂質土に覆われ、製塩土器、土器器壳等が出土した。図化できるものはないが、土器溜り2の出土遺物として取り扱うことにする。焼焼部床面上に花崗岩の支脚が一つ立てられていた。位置は主軸線上で、掛け口の穴内におさまるとしてもかなり手前寄りである。支脚は方柱状で、底面は11cm×7cm、上端は7cm×3cm、高さ27cmである。上端は劣化が進み、角が取れて丸くなっている。廃絶後に目立った破損もなくこれほどよく保存されている例は少ないのではなかろうか。調査後に遺構を切り取り持ち帰ったが、保管中に乾燥のため崩壊し土塊と化した。

#### 土器溜り2

調査区南東で検出された。造り付けカマドを備えた建物が廃絶された後、その中に製塩土器などの廃棄物を投棄した跡と考えられる。検出面ではカマド以外に山土の塊が2か所現れたが、遺構とは思



第11図 カマド実測図 (S=1/30)

である。材質はスサを混入した粘土で、短く切った葉のような繊維の痕跡が確認できる。表面はくすんだような褐色、内部は鮮やかな明赤褐色を呈する。遺構に伴う遺物は見られなかった。近辺から須恵器高杯(115)、甕(124)が出土したが、これらは包含層の出土遺物として取り扱った。

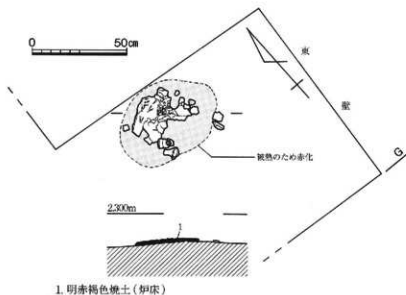
#### 土器溜り1

調査区北西において遺物の密度が比較的濃厚な範囲を土器溜り1とした。堆積土は暗灰褐色砂質土で、直上の包含層との識別は困難である。全体の範囲を推定すると、幅3m程度で北西・南東方向に伸

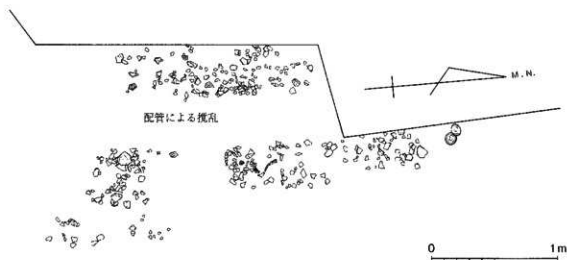
われなかった。遺物はやや硬くしまった暗黄褐色砂質土に含まれている。間層は認められず、一度に埋められたものと理解している。ほとんどの製塩土器の表面には炭混じり黒褐色土が付着していることから、製塩炉で使用されて役目を終えた後まもなく廃棄されたのであろう。他に土師器、粗製土師器、須恵器、イノシシ類あるいはシカと思われる動物遺体、モモの核が出土した。

#### 炉跡

調査区南東で炉床の一部と考えられる焼土塊が検出された。炉は暗灰褐色砂質土の上に直接築かれており、周辺は被熱により赤く変色しているが、もともとの範囲を推定することはできない。灰、炭はみられず、破壊が進んでいることがうかがえる。炉床は40cm四方くらいの広がりですべて平面的に残っているが細かく砕けている。厚みは平均で3cm程度



第12図 炉跡実測図 (S=1/20)



第13図 土器溜り1平面図 (S=1/30)

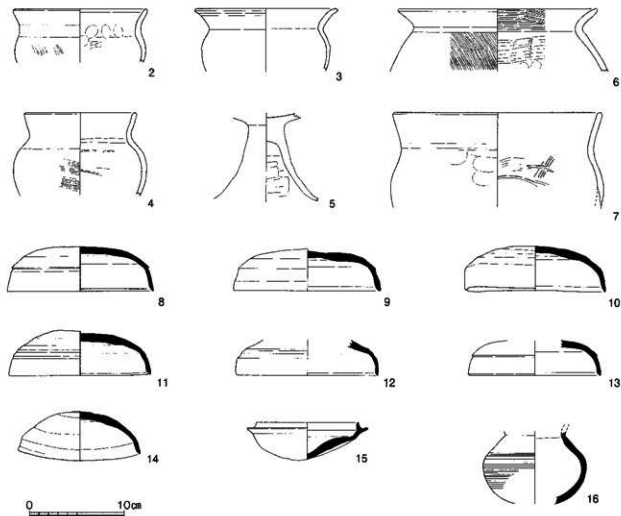
びるようである。土器溜り2のように明確な遺構内に堆積したのではなく、緩やかな窪地に堆積したものと思われる。上層は配管工事により攪乱を受けている部分がある。下層では西塚付近に遺物が偏在し、堆積の中心が調査区外の西側であることが知られた。出土遺物には土師器、粗製土師器、須恵器、製塩土器、イノシシ類(下顎骨など)、シカ(角、歯、中手骨など)がある。鹿角は角座部、先端部の断片であるが、先端部の断面は切断されたかのように平坦である。今回の調査で検出された土器溜りは、香川県の宮兵衛島遺跡や倉敷市阿津走出遺跡で見られる「土器層」とは異なり、遺物の密度は低い。製塩土器以外にも生活に関連した遺物が含まれているおり、これが広江・浜遺跡の特徴と見えよう。

### 3. 遺物

#### (1) 土器溜り1出土遺物(第14図～16図、図版7)

2～7は古墳時代の一般的な土師器である。全体的に丁寧な作りで焼け歪みはほとんどない。2～4は小片のため詳細はわからないが、小型丸底甕と思われる。調整はいずれも口縁部に丁寧なヨコナデを施し、体部をハケメ調整後ナデ仕上げしている。色調は橙色を呈する。3はやや大きく外反する口縁部をもち、端部を丸くおさめる。5は高杯である。わずかに残る杯底部内面にはハケメ調整がみられる。脚部の調整は外面がハケメ後ナデ。内面はヘラケズリ後裾部をナデ仕上げする。6,7は甕で、6の体部外面と口縁部内面にはハケメ調整が施される。色調はくすんだ褐色を呈する。7の口縁部屈曲は弱く、内面はハケメ調整後ナデ調整が施される。色調はくすんだ暗灰黄色を呈する。

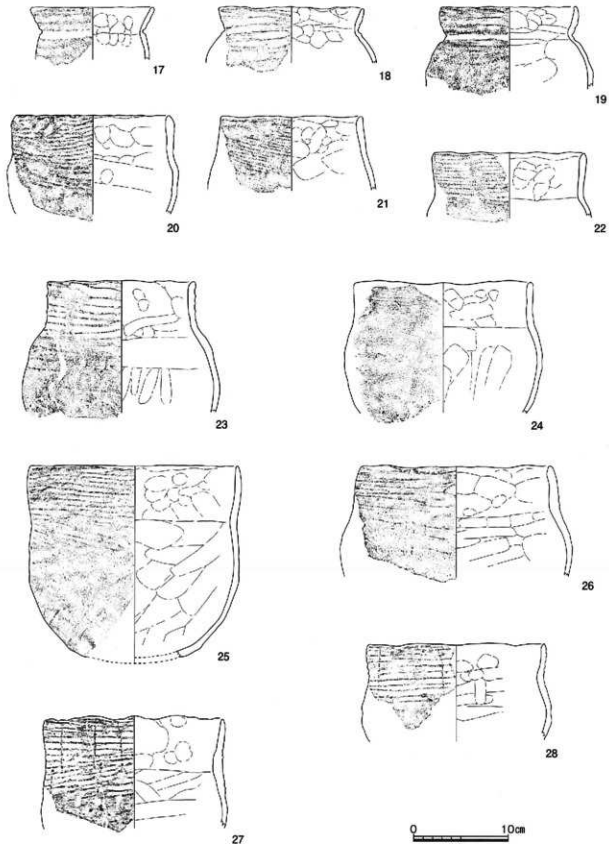
8～16は須恵器で、8～14は杯の蓋である。8は天井部を平坦気味に整形し、少し外に開く口縁との境に稜をなす。口縁端内側は段をもち、比較的シャープな作りである。口径は14.4cm、高さ4.7cmを測る。9～13も同様の形態であるが、8と比べて稜は鈍く、口縁端内側の段も明瞭でない。10、11、12の稜は沈線で表される。9～13のうち法量のわかるものの口径は14.6～14.8cm、高さ4.4～4.9cmを測る。これらは陶器編年のⅡ型式2～3段階に対比できるであろう。14は完形であるが焼け歪みが激しく楕円状に変形している。天井部を丸く整形し、口縁端を尖り気味に仕上げる。歪んだ口縁端の一周の長さを測り、それを正円に置き換えてみると直径11.8cmという値が得られる。15は杯



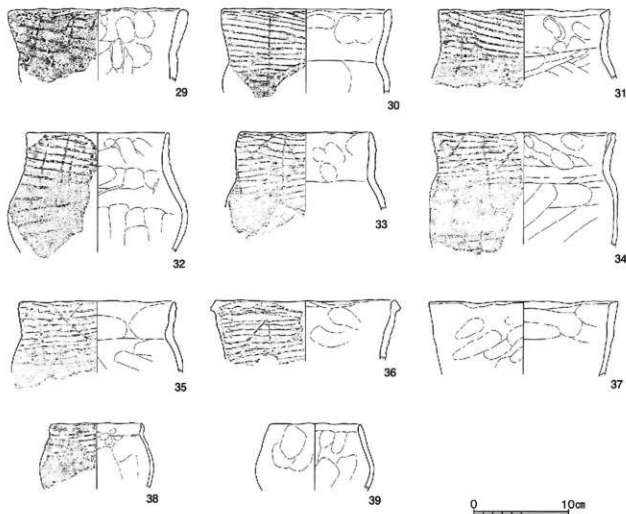
第14図 土器溜り1出土遺物1 (S=1/4)

身の完形品である。立ち上がりは5mmと短く、受け部に蓋が融着した痕がある。口径10.6cm、器高4.0cmを測る。14と15は隣接した位置で出土している。他の壺杯と比べて新しい時期のものであり、後に混入された可能性がある。16は、円孔の存在が確認できないが、遽と思われる。体部中位の外面にはカキメが施される。

17～39は製塩土器である。17～19は口縁部がく字状に屈曲し、肩部を張らせた器形である。17の屈曲部外面には沈線様の線が加えられている。外面には、口縁部から肩部にかけて間隔の粗い平行タタキが施される。口縁部内面は指頭圧痕が顕著で、粘土の継ぎ目や成形のときにできたしわを残した部分がある。体部内面は比較的平滑にナデ仕上げが施される。20は口縁部が直立し、肩の張りは弱い。21は口縁部が肩部から直線的に内傾する形態を呈する。間隔の密な平行タタキが施される。22～24は口縁部が直立し、肩を張らせた形態である。20、22には間隔の密な平行タタキが、23、24には間隔の粗い平行タタキがやや浅く施される。口縁部内面は指ナデにより凹凸を消しているが指頭圧痕が無数に残る。体部上位の調整については、口縁部との境付近に水平または斜方向に一定の幅をもつ薄板か何かの工具でナデ調整が施される。それより下位は縦位を基調とした工具ナデや指ナデが施される。体部上位の内面の調整を丁寧に行うという特徴は、広江・浜遺跡から出土する古墳時



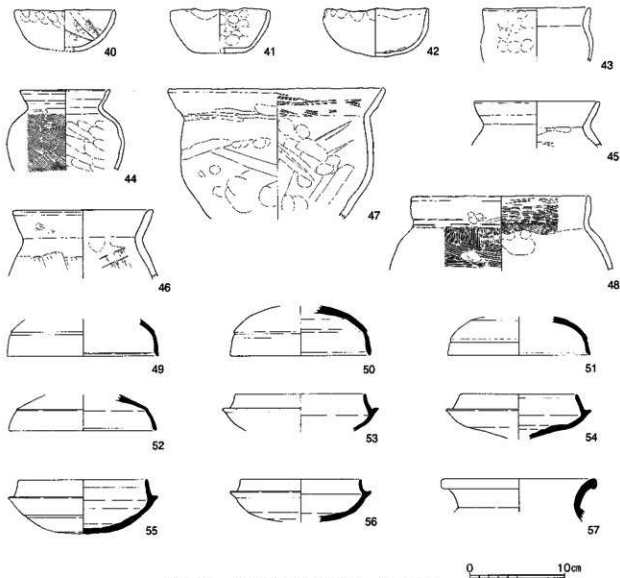
第15図 土器溜り1出土遺物2 (S=1/4)



第16図 土器溜り1出土遺物3 (S=1/4)

代後期の製塩土器に共通して認められる。25は口縁部が少し内湾する。肩部の張りは弱く、外面だけ見るとずん胴に近い器形であるが、内面には口縁部と体部に明瞭な境が認められる。口縁部と肩部にかけて間隔の粗い平行タタキが浅く施される。体部上位の内面の調整については、口縁部との境を意識しながら工具を水平または斜方向に動かし、丁寧にナデ調整を行っている。26も口縁部が少し内湾するが、肩部の張りは23、24と同程度である。間隔の粗い平行タタキが浅く施される。27、28、30～36は水平方向の条線に間隔のあいた縦線を加えたような格子目状のタタキを有する。さらに、33～35にはたすきがけのような二方向の斜線が、36には右上がりの斜線が加わる。形態を概観すると、27は口縁部が少し内湾し、肩の張りが弱いタイプ。28は口縁部と体部の境目が不明瞭である。30、31、33、34は口縁部が直立し、肩を張らせたタイプである。32、35、36については上記のタイプに当てはめることが困難である。29は整った横長の格子目タタキを有する。口縁部が直線的に外傾するタイプで、肩の張りは弱い。38は薄手小形の製塩土器で、上記のものより後出の製塩土器と思われる。口縁部から体部上位にかけて平行タタキが施され、口縁部内面は指頭圧痕、体部内面は工具によるナデ調整が施される。土器溜り1出土の製塩土器でタタキ目に注目すると、量的にやや多いのが間隔の粗い平行タタキが浅く施されるタイプで、間隔の密な平行タタキをもつものと水平





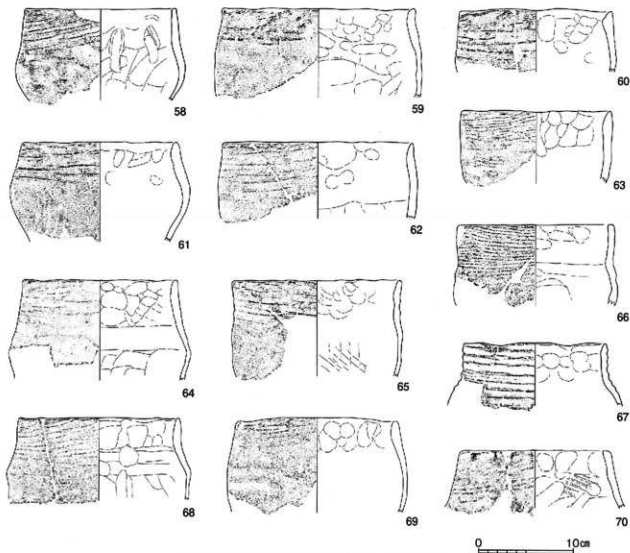
第17図 土器溜り2出土遺物1 (S=1/4)

条線からなる格子目をもつものがほぼ同量である。29のようなタタキ目は少ない。37、39は類製塩土器と呼ばれるものであろう。どちらも内外面に指ナデのような凹凸がある。37は口縁部が少し外傾して立ち上がるが、体部との境は明瞭でない。39は口縁部が肩部から直線的に内傾し、製塩土器にも見られる形態であるが、小形で器壁がやや薄い。

出土遺物にはこの他に土師質の移動式カマドの小片があるが図示できない。

#### (2) 土器溜り2出土遺物(第17図～19図、図版8)

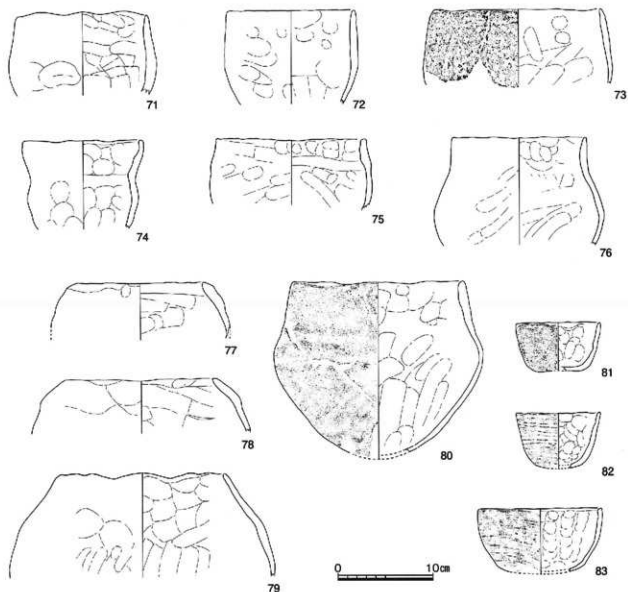
40～43は粗製土師器である。本報告で粗製土師器とした資料は師楽の上師器あるいは師楽系土師器とも呼ばれるもので、胎土の違いや全体的に波打つ口縁、無数の指頭痕を残す器面に象徴される作りの粗雑さで通常の土師器と区別できる。また、色調・焼成が製塩土器と共通することから、製塩土器の製作者が作製したものと考えられている。40～42は椀形の鉢で40は底に平部分を少し作っている。外面にはナデ調整が施され、指頭圧痕が口縁部に残る。内面にはハケメ調整を施しているが、工具を止めた痕だけが鮮明で、条線はほとんど目立たない。41は平底で、外面にはナデ調整が施され、



第18図 土器溜り2出土遺物2 (S=1/4)

指頭圧痕が残る。内面には、連続する指頭圧痕が残り、小形コップ形製塩土器の調整痕に類似する。42は丸底で、内外面には指頭圧痕が残る。口縁部は軽く指で押さえたぐらいの仕上がりにとどまる。底部は指による押圧で凹凸が生じている。43は外反する短い口縁をもつ。外面にハケメ調整を施しているが、指頭圧痕に覆われて器面調整の効果はほとんどみられない。44は土師器の小形二重口縁壺で、口縁端には面をもたせる。45、46は土師器の壺である。いずれも小片のため詳細はわからないが、46は内外面にハケメ調整を施しているようである。47は粗製土師器の鉢で、粗いハケメ調整の後ナデ調整が施され、器面は製塩土器の体部のように凹凸がある。外面はにぶい橙色を呈し焼成は良好。48は粗製土師器の壺と思われる小片である。内外面は粗いハケメ調整を施し、口縁部外面にナデ調整を加える。器面に凹凸が残り雑な仕上がりである。色調は灰黄色を呈し、焼成は良好である。

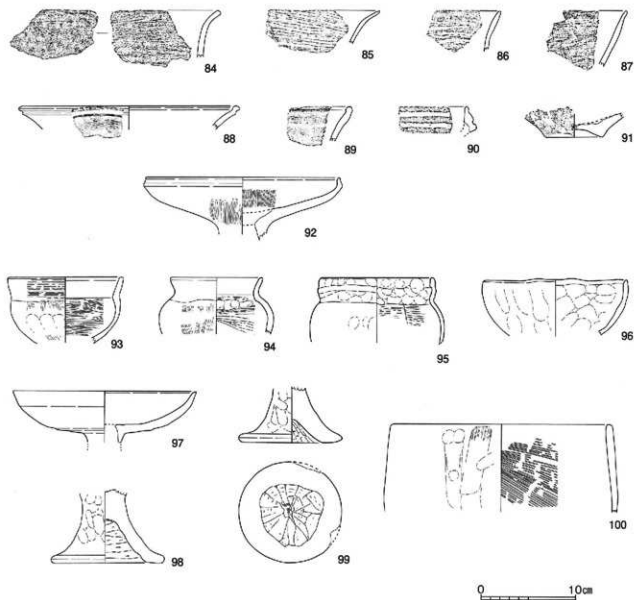
49～57は須恵器で、49～52は杯蓋である。いずれも口縁は少し外に開き、端部内側には段をもつ。天井部と口縁部の境の稜は、49、51は鈍い段状となり、48、50は沈線で表される。50はやや丸みを帯びた天井部をもつようである。53～56は杯身である。54は底部が歪む。立ち上がりは内傾し、受け部からの高さは53～55が15～18mm、56が13mmを測る。53～55の口縁端部内側には段の痕



第19図 土器溜り2出土遺物3 (S=1/4)

跡程度のもが認められる。56は後出的要素がみられる。これらの蓋杯は陶邑編年のⅡ型式1～2段階の中におさまると思われる。57は壺の口縁部である。口縁部は体部から外反して立ち上がる形状である。口縁端は外側に折り返して肥厚させ、まるくおさめる。

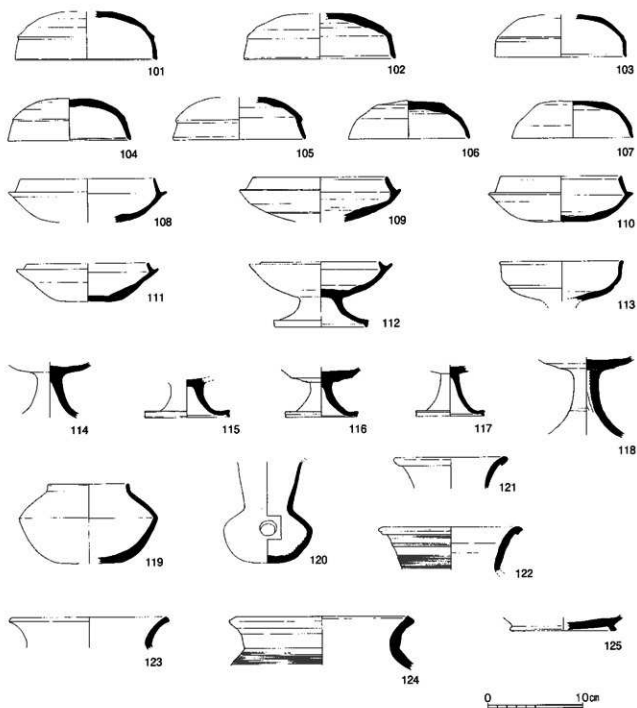
58～83は製塩土器である。58～70には平行タタキが施される。タタキ日の種類には63、66のように間隔の密なものゝ粗いものゝあり、間隔の粗いものゝ中では、67は深く鮮明で、58～62、64、65、68～70は浅く不明瞭である。浅く不明瞭なものゝ、タタキ板の刻み日が浅いことによると思われるが、59、69のようにナデ消したような痕が確認できるものゝもある。形態については、口縁部が直立し、肩を張らせたもの(67)、口縁部と体部の境目の無いボウル形の器形をもち、口縁端部を内傾気味にするもの(59、60、62、63、69)、肩部から直線的に内傾する口縁部を有するもの(58、61、64、68、70)、口縁部が少し内湾し、肩の張りが弱いもの(66)がある。65は口縁部が直立し、肩が張らない器形である。全体的に薄く作られている。71～80にはタタキが施されないが、タタキ



第20図 包含層出土遺物1 (S=1/4)

が施される製塩土器にもみられる形態をもつ。内外面に工具あるいは指を使ったナデ調整が施される。磨耗の著しい73以外の外面には間隔をあけ、指先で弧を描くように押さえるやり方の調整がみられる。押圧の先には小さな膨らみが生じている。内面のナデ調整に呼応するものであろうか。80の底部には少し指を開いた状態の掌のような圧痕が認められる。74は焼け歪みが激しく、本来の器形が明らかでない。77～79は口縁部を極端に内傾させる。口縁端を薄くする傾向が認められる。全体が球形に近い形態と思われる。81～83は小形の製塩土器である。81、82は低いコップ状で、底には平坦部分が少しある。81の外面は磨耗が著しく、わずかに平行タタキ痕が認められる。82は全体に平行タタキが施される。2点とも内面には深い指頭圧痕が残り、凹凸が著しい。83は碗状の器形で、外面全体に平行タタキが施される。この平行タタキは間隔が粗いもので、例えば58の平行タタキによく似ている。内面には縦方向に連続する指頭圧痕が残る。

出土遺物にはこの他に土師質の移動式カマドの小片がある。

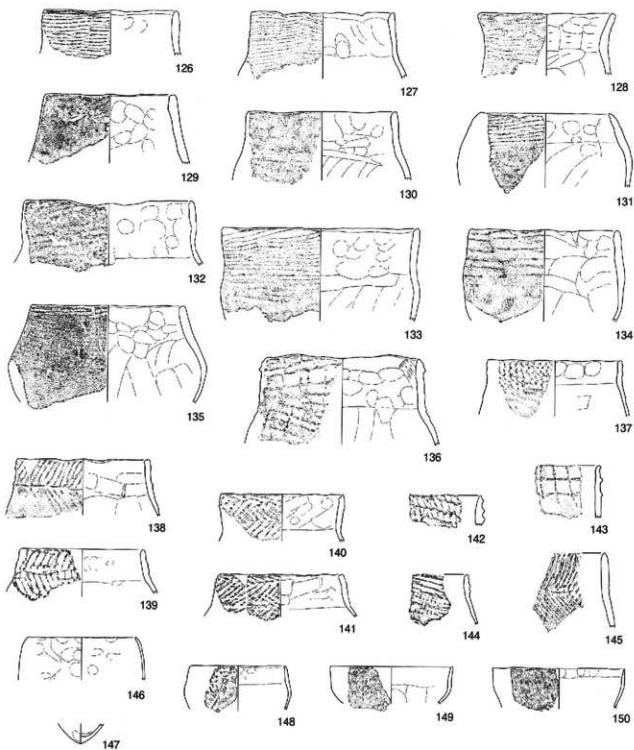


第21図 包含層出土遺物2 (S=1/4)

## (3) 包含層出土遺物 (第20図～26図、図版9～11)

ここでは暗灰褐色砂質土および淡茶褐色砂質土から出土したもののうち遺構に伴わない出土遺物を取り上げる。

84～91は縄文土器である。84の器形は深鉢形と思われ、口縁端断面は角張った形状である。外面は暗褐色で横方向の条痕の後ナデ調整、内面は明黄褐色で横方向のミガキ調整が施される。85は浅鉢形の器形で、口縁端断面は先細りの形状である。外面は明赤褐色から明黄褐色を呈し、横方向の繊細な条痕調整、内面は灰黄褐色から黒褐色を呈し、ナデ調整が施される。86、87は深鉢形の器形で、



第22図 包含層出土遺物3 (S-1/4)

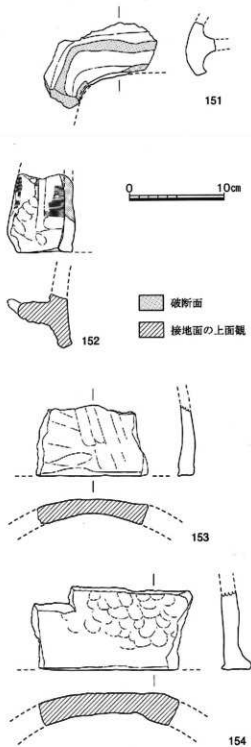
内外面とも褐色を呈する。86の外面には条痕調整、内面はナデ調整が施される。87の外面は擦痕がみられ、内面はナデ調整が施される。88は精製の浅鉢である。口縁外側には1本の沈線がめぐり、口縁内側は端部を残して器壁を薄くし、段を作っている。内外面とも灰黄褐色を呈し、丁寧なミガキ調整が施される。89は浅鉢で、口縁内側の端部近くに段を作っている。外面は赤褐色、内面は灰黄褐

色を呈し、両面ともミガキ調整が施される。90の口縁外側には2本の沈線がめぐる。黒褐色を呈する。91は底部で、外面は赤褐色を呈する。84～89は縄文時代晩期に属すと思われる。90は縄文時代後期の可能性がある。

92は弥生時代後期の高杯である。杯部から脚部にかけて一体で成形し、底に粘土を貼る方法で作られている。短く立ち上がる口縁部外面には退化した浅い凹線が一条めぐる。色調は全体的に赤褐色で、内外面とも丁寧なヘラミガキ調整が施される。

93、94は土師器の小型丸底壺である。内外面ともハケメ調整が施される。95は粗製土師器で、二重口縁の小形壺を模したものである。口縁部中ほどに鈍い屈曲があり、その内側には粘土の継ぎ目が残る。口縁部内外面にはヨコナデが施されるが、指頭圧痕が顕著である。体部には内外面ハケメ後ナデ調整が施される。96は粗製土師器の鉢である。内外面ともハケメ調整後ナデ調整が施されるが、指頭圧痕がよく残り、雑な作りである。97は土師器の高杯である。器表面が荒れて細部は観察できないが、底部外面に鈍い稜が認められる。98、99は粗製土師器の高杯である。同系色で、焼成も似ていることから近い時期に同じ手法で製作されたものと考えられる。99は、中実の円錐状のものを作り、その底から粘土を削り取ることによって脚部を成形し、未調整のまま焼成している。削り取る粘土の量が十分でないため、たいへん分厚い作りとなっている。98も同様の方法で作られているが、粘土の削り取りが奥深くまで及び、99と比べて器壁を薄くしている。成形後は脚柱部内面に粗いヘラケズリが施される。98、99の外面の調整は、ハケメ調整後ナデ調整が施され、精粗の差は認められない。100は土師器の小片であるが、甌の可能性もある。内外面ともハケメ調整が施され、比較的丁寧な作りである。

101～125は須恵器である。101～107は杯蓋である。101、105は天井部と口縁部の境に稜をもち、101の口縁端部内側には沈線、105には面がみられる。102～104には退化した稜が見られ、104の口縁端部内側には沈線、102、103には面がみられる。106、107の口径はどちらも12.8cmを測る。101～105と比較して後出的な要素が認められる。108～111は杯身である。立ち上がりは内傾

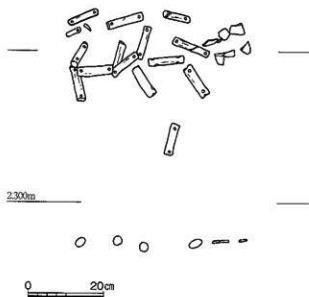


第23図 包含層出土遺物4  
(S=1/4)

し、受け部からの高さは108～110が13～17mm、111が6mmを測る。110は口縁端部内側に面をもち、109には沈線がめぐる。112～118は高杯である。112は有蓋の高杯で、低脚が付く。立ち上がりは短く、口径12.4cm、器高6.9cmを測る。119は短頸壺である。肩の位置は中心よりやや上で、最大径は14.5cmと推定される。120は甕である。口縁部を欠くが、その他は良く残っている。体部の肩に円孔を開け、頭部は緩やかに外傾しながら直線的に立ち上がる。残存する部分には施文は認められない。121～123は壺の口縁部で、体部から外反して立ち上がる形状である。121、122の口縁端は外側に折り返して肥厚させる。124は甕の口縁部である。125は高台の付く底部である。器種はわからない。

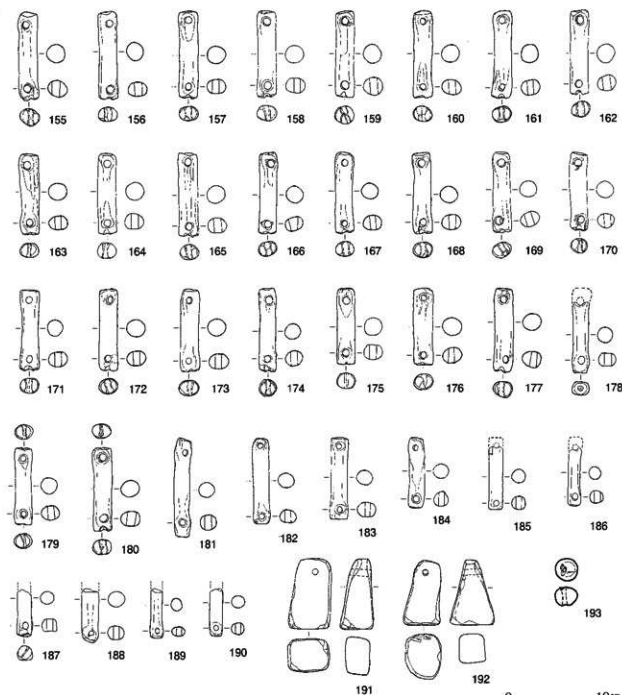
126～150は製塩土器である。126～136は古墳時代後期の製塩土器の中でも、広江・浜遺跡の土器製塩が最盛期を迎えた頃のものである。136には横長の格子目タタキ、それ以外には平行タタキが施される。平行タタキの種類については、土器溜り2出土のもの共通する。126、127、131～133はタタキ目の間隔の密なもの。134、135はタタキ目の間隔が粗く、その上をナデ消した痕がある。129、130はナデ消しが強いためタタキ目の様子が確認できない。形態については、口縁部が直立し、肩を張らせたもの(126、127、130、132、136)、口縁部が直立するが、肩がほとんど張らないもの(133)肩部から直線的に内傾する口縁部を有するもの(129、135)、口縁部と体部の境目の無いボウル形の器形をもち、口縁端部を内傾気味にするもの(134)、球形の器形をもち、口縁部を内傾させ、端部を薄く作るもの(131)がある。128は歪みがひどく本来の形態を示していないかもしれない。137～145は様々な種類のタタキ目をもつ製塩土器で、126～136の段階よりも新しいと考えられている。137、142には細かい斜格子、138、139、145には「矢羽根形」、140、141には「連続山形」、143には正方形に近い格子目、144には「平行+格子目」がみられる。142、145以外は薄手の作りである。146～150は薄手の製塩土器でタタキが施されない。さらに新しい段階のものと考えられている。146、147の器表面には無数の指頭圧痕が残る。148～150は小片のため詳細はわからない。

151～154は土師質の移動式カマドである。151、152は同一個体の可能性がある。151は焼き口上部左側付近の破片である。口縁部を欠き、付け庇の基部だけが残る。152は焼き口基底部左側の破片で、庇が貼り付けられる。外面にハケメ調整が認められ、庇部分に指頭圧痕が残る。151、152ともに色調はにぶい赤褐色を呈し、焼成は良好である。153、154は基底部の破片である。153は底部を内側に少し拡張することにより安定感を加える。にぶい黄褐色を呈し、焼成は良好。内外面ともナデ調整が施される。154は底部を外側に拡張する。にぶい黄色を呈し、焼成は良好。外面はナデ調整、内面は指押えがみられる。この他にも図化できなかったが、庇の剥離した焼き口部分の破片、庇部分の破片等が出土している。



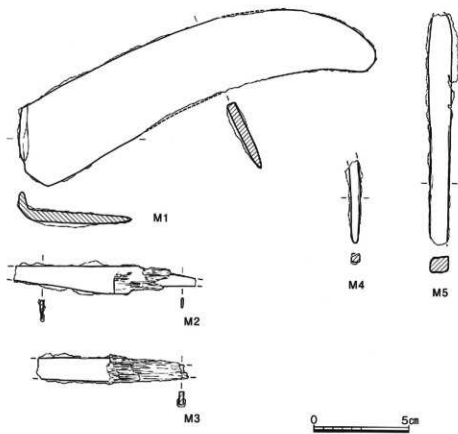
第24図 土鍾出土状況図 (S=1/10)





第25図 包含層出土遺物5 (S=1/4・S=1/2)

155～190は双孔棒状土錘である。細身の円柱の両端に円孔を開けた土製品で、まとまった量が出土した。側面から見た穿孔方向を実測図では表していないが、両孔面に対し垂直方向にまっすぐ開けることを志向していると捉えた。155～180は長さ7.9～9.3cm、幅1.6～2.0cm、孔径6.5～7.0mm、重さ31.5～41.9gを測る。楕円形の端面に加工が見られ、155～177には一端に、179、180には両端に幅5mmくらいの溝を焼成前に付けている。溝の方向は穿孔方向にだいたい一致している。178には溝ではなく、浅い円形刺突が付いている。155～159、162～170、175、179、180の17点は集中した状態で出土した。181～183は端面に加工が見られない。155～182は灰白色か灰色を呈し、



第26図 包含層出土遺物6 (S=1/2)

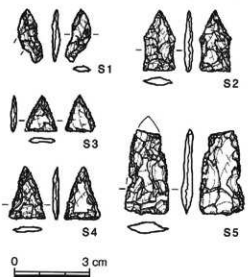
焼成は堅緻である。黒斑がみられるものがある。183は須恵質で、焼成は堅緻である。184～190は小形で黄橙色のもので焼成はややあまい。191、192は鐘形土製品である。横断面が長方形状で、末広がり形作られる。上部はやや扁平となり、この部分に貫通する円孔が開けられる。191は高さ7.5cm、下端幅は4.4×3.5cm、孔径0.6cm、重さ143.8gを測る。褐色を呈し、焼成はややあまい。192は高さ6.9cm、下端幅は3.8×4.7cm、孔径0.6cm、重さ119.2g

を測る。192では円孔を開けた面の下端幅が開けない方よりも狭くなっている。使用ずれのためか下端部分の一角が丸くなっている。にぶい橙色を呈し、焼成はややあまい。

193は土玉である。直径1.1cm程度の球形で、径1mm程度の小孔が開けられる。孔の一方の表面付近には穿孔具でできた傷があり、その部分から亀裂が生じている。灰黄色を呈し、焼成は良好である。

M1は鉄鎌である。基部から刃先までの長さは18.9cm、厚さは0.5～0.65mmである。刃部は先端が鷹の嘴状に曲がる曲刃の形態をとり、断面は両刃である。基部には着柄のための折り返しがある。この折り返しは刃先を向かって左に向けた場合、向こう側に曲げられている。また、基部の上端部のみを折り返すことから、松井和幸の分類に従えば乙C類となる<sup>1)</sup>。

M2、M3は刀子である。いずれも先端と基部を欠損しており、全長はわからない。M2は残存長9.6cm、刃部の最大幅1.5cm、厚さ0.25cmである。刃部は先端にいくほど細くなっており、使用によって磨ぎ減りしたものかもしれない。基部には木質が部分的に残存している。厚さは0.1mmと極端に薄い。M3は残存長8.0cm、刃部の最大幅1.6cm、厚



第27図 包含層出土遺物7 (S=2/3)

さ0.5cmである。錆化がひどく刃部の断面形状は不明である。基部断面は長方形を呈し、厚さ0.3cmである。木質が残っている。

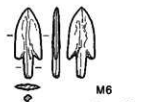
**M4**は釘の先端か鋸の茎部である。残存長4.4cm、断面は一辺0.5cmの方形を呈する。木質などは残っていない。

**M5**は鏝か槌と推定される。残存長12.3cm、断面は一辺0.9～1.1cmほどの方形を呈する。一端がやや太くなっているようであるが、錆化が著しく明確でない。太い方に木質らしき痕跡も認められるがはっきりしない。

包含層中からは総数25点のサヌカイト製石器・剥片及び流紋岩剥片2点が出土しており、そのサヌカイト総重量は47.9g、流紋岩の総重量は3.8gである。器種として明確なものは、サヌカイト製の石鏃5点と加工痕のある剥片1点である。**S1～5**はサヌカイト製の石鏃である。**S1**のみは凹基鏃で他は平基鏃である。**S1**は片方の脚部を欠損しているが、挟りはやや深い。**S2**は五角形を呈する平基鏃で、比較的丁寧に作られている。**S3～5**は三角形を呈する平基鏃である。**S3**は小形で、正三角形に近い形状を呈するが、**S5**はやや大形で縦長の鏃である。

#### (4) その他の出土遺物 (第28図、図版11)

**M6**は造成土から出土した銅鏃である。逆棘のある有茎鏃である。全長4.13cm、重さ5.4g、刃部は長さ2.81cm、幅1.48cm、厚さ0.41cmである。鏃があり、その両端に極もあつたようであるが不明瞭である。茎部は径0.4cmで、断面形状はいびつな四角形である。



第28図 銅鏃 (S=1/2)

註

(1) 松井和幸「鉄鏃について」『考古論集』潮見浩治官記念事業会 1993

### 第3節 まとめ

#### 1. 遺構について

今回の調査で検出された遺構は、土壌6基、造り付けカマド1基、炉跡1基、土器溜り2か所である。土壌については性格や互いの関係などがわかるようなものはなく、埋土の違いをから新旧の差を認めるにとどまった。すなわち、黒色細砂を埋土とする土壌2、3が暗灰褐色砂質土を埋土とする他の土坑に先行すると推測される。土坑からの出土遺物のほとんどは混入や流れ込みかもしれないが、所属時期についてはいずれも古墳時代後期の中におさまると思われる。

その他の遺構の前後関係を示すと、造り付けカマドの廃絶→土器溜り2→炉跡ということが判明している。土器溜り2の堆積物の所属時期は6世紀初頭～中頃までと推定され、カマドの使用期間もこれに近い可能性がある。造り付けカマドを設けた建物の構造を明確に把握できなかったが、堅穴式住居である可能性と覆屋を設けた程度の簡易な建物の可能性の両方を考えたい。ただし、建物の外への排煙を目的とした煙道を設けていることは、ある程度の遮蔽された空間を示唆するであろう。当該期の広江・浜遺跡では海岸砂州一帯で土器製塩を展開しており、今回の調査区もその作業区域一角であったとすると、落ち着いて居住する場所は背後の山裾に近い部分がふさわしいと思える。作業場の一部にこのような施設を構えるということは、作業員用の炊事場と考えられるが、よほど生活に密着

した体制で操業を行っていたのであろう。このカマドが廃絶後ほとんど破壊を受けることなく埋められていることは、移動式カマドが意識的に壊されたかのように細かい状態であったことと対照的である。造り付けカマドの土材は黄灰色の山土で、背後の山から採掘されたと考えられる。これまでの調査でもいくつかの地点で焼けていない山土塊が検出されており、火を扱う施設の構築に用いられることが頻りにあったことがうかがえる。このような材料が付近に存在することも土器製塩遺跡の立地条件の一つであろう。

土器溜り2は、廃絶された建物の中に、付近にあった炉で使用された製塩土器、生活用の土器などを投棄した跡と考えられる。遺構を廃棄物で覆い整地することにより空間の再利用を行っているかのようである。整地後には新たに炉が築かれ、ここで製塩作業が行われている。

その炉跡は床面のごく一部を検出したに過ぎないが、粘土にササを混ぜ、しっかりとした炉壁を築いている。関連する遺物も皆無であり用途は判明しないが、煎熬工程で使用されたのではなかろうか。

土器溜り1も炉から排出された製塩土器や生活ゴミなどを低地に廃棄した跡と考えられる。出土動物遺体にはイノシシ類（家畜種の可能性を含めて）、シカが含まれている。未だ専門的分析を行っていないので今後の課題としたい。また、微細な遺物に対応した土壌サンプルの採取は行っていないが、土器溜り1の堆積層は土壌分析を試みてもよかった内容と言えるだろう。出土した鹿角には切断したような痕跡が認められたが、当該期においては刀子の柄や釣漁具などにも使用されることがあるので注意される。これらの動物遺体は基本的には食べ滓と考えられ、生活臭の深い活動状況がうかがわれる。倉敷市阿津走出遺跡<sup>(1)</sup>で検出された「土器層」には製塩土器以外の遺物はほとんどなく、生産体制の違いをうかがわせる。

## 2. 遺物について

### (1) 製塩土器

広江・浜遺跡の製塩土器については、1979年刊行の報告書<sup>(2)</sup>において須恵器の蓋杯と対比した編年図が示されており、今回の調査でもそれを確認することとなった。第18、19図の土器溜り2の厚手で大形の製塩土器でみると、無文で口縁を内傾させるものや浅く間隔の粗い平行タタキをもつもの、あるいは間隔の密な平行タタキをもつものといった古層とされる土器が主体となり、後出とされる第18図の67のようなものが少し含まれる。これにⅡ型式1～2段階の須恵器が共伴するという状況が認められるのである。土器溜り1の製塩土器（第15、16図）には水平条線からなる格子目タタキをもつものが出土しており、後の段階になって加わるタイプの可能性がある。また、薄手の作りで「欠羽根形」、「連続山形」、「平行+格子目」などといったタタキをもつものが土器溜り1、2から出土せず、包含層にだけみられるということも、これらの土器が後出のものであるという認識と矛盾しないであろう。

広江・浜遺跡から出土した製塩土器で最も多い種類がこれまでも記したとおり、大形厚手丸底タイプで、備讃瀬戸地域の製塩土器の編年で備讃Ⅵ式とされているものである<sup>(3)</sup>。香川県大浦浜遺跡報告<sup>(4)</sup>でタタキおよび形態の分類が行われ、前節の製塩土器の記述でも参考にさせていただいた。しかし、同報告や喜兵衛島遺跡報告<sup>(5)</sup>でも述べられているとおり、この土器の分析は一筋縄ではいかないようである。口縁部分の歪みが特に激しく、どのような形をイメージして製作されたのか判断に迷うも

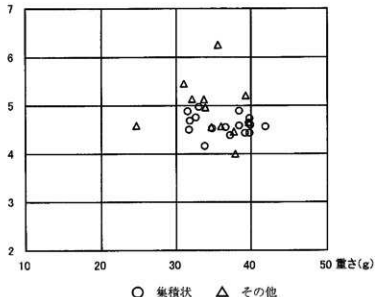
が多い。実測図作製の際に土器の正立状態、復元口径を求めるのが困難なことも形態分類の支障となっている。それでも、多様なバリエーションの背景にあるものを読み取ることを目指すならばその作業は有効と考えたい。今回は事実報告にとどめるが、これまでの出土土器についてある程度の整理も今後は必要であろう。

## (2) 双孔棒状土錘

今回の調査で出土した土錘には、60点以上の双孔棒状土錘の他管状土錘がある。管状土錘については、わずかに断片が2、3点包含層から出土している程度であり、双孔棒状土錘が他の形態の土錘を伴わず単一種で出土したといってもよい。双孔棒状土錘は、棒状土錘、有孔土錘あるいは、分布の特徴から瀬戸内型土錘とも呼ばれている。管状土錘や有溝土錘のように魚網錘として後世まで残るのに対し、双孔棒状土錘は中世のうちに消滅しているらしい<sup>(9)</sup>。第24図に掲げたもののうち、155～182は灰白色のやや硬質で、183は須恵質そのものである。いずれも海中での耐久性の高さを感じさせる。小ぶりの184～190はやや軟質で赤みを帯びており焼成の差が認められ、土師質に近い焼きのようである。出土土錘のうちで、孔付近の糸ずれなど使用痕跡が顕著に認められるものはない。こういった土錘がどのような種類の網に何個用いられたのかはこれまでの発掘で確かめられていないが、先学<sup>(7)</sup>の分析方法に従い、完形品29点について計測分布を示した(第29図)。出土状況から、一か所に集中して出土した17点(「集積状」と「その他」に分けたところ、「集積状」が長/幅値4～5、重さ30～40gの間にまとまり、規格性をもつ土錘群であることが知られる。「その他」の中にもこの範囲に収まるか、接近するものがある。和歌山市内庄遺跡報告<sup>(8)</sup>でこの規格に近い土錘が調査分析されており、結論を引用すれば底刺網に用いられたものと考えられることができる。一方、魚網への装着方法を探る材料として、土錘端部の片方または両方に溝を刻んでいる点に注目し、投網との関連をうかがう見解<sup>(9)</sup>もある。分析を行った全てに溝が刻まれており、そのうち2点は両端に刻まれていることは魚網の構造を考えるうえで重要であろう。極々新しい時代の資料であるが、福田町誌<sup>(10)</sup>に記載された明治末期頃の呼松漁業組合

と福田新田漁業組合の漁業の実態を見ると、福田村沖において行われた漁法として「建下網、投網、四ツ張網、引網、打瀬網、流瀬網、釣漁、只取、餌虫取」が揚げられ、網漁では様々な漁法が行われていたことが知られる。この中で建下網漁とは、満潮時に網を設置し、潮が引いたときに漁獲を行う漁である。岡山県の建網は刺網類に分類される<sup>(11)</sup>。魚種は不詳としているが、ボラ、イナ、チヌ、スズキ、セイ、ハゼ、タナゴ、サワラ、マダイなどの種類が両漁協を合わせた漁獲一覧表に記

長さ/幅



第29図 双孔棒状土錘の計測値分布図

載されている。古墳時代後期段階の広江・浜遺跡の漁業は、土錘の出土量から推して小規模な魚網によるものとするならば、上でみた網漁の中では、雑魚ねらいの建干網、投網あたりに近いイメージではないだろうか。

註

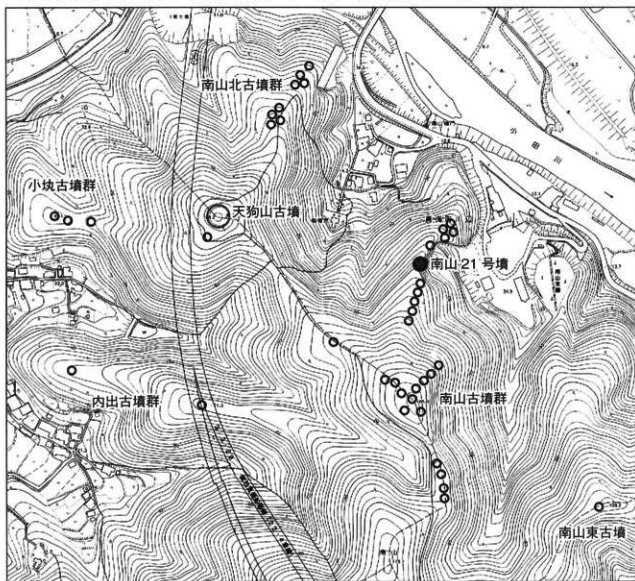
- (1) 下澤公明・内藤善史「阿津走出遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』71 岡山県教育委員会 1988
- (2) 間壁忠彦・間壁稔子「広江・浜遺跡」『倉敷考古館研究集報』第14号(財)倉敷考古館 1979
- (3) 大久保徹也「古墳時代以降の土器製造」『吉備の考古学的研究(下)』(株)山陽新聞社 1992
- (4) 大山真充・真鍋昌宏「大浦浜遺跡」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』Ⅴ 香川県教育委員会 1988
- (5) 近藤義郎編「喜兵衛島-師楽式土器製造遺跡群の研究-」喜兵衛島刊行会 1999
- (6) 内田律雄「第1章 第6節 双孔棒状土錘について」『古代日本海の漁撈民(ものが語る歴史17)』(株)同成社 2009
- (7) 真鍋篤行「瀬戸内地方出土土錘の変遷」『瀬戸内地方出土土錘調査報告書(Ⅱ)』瀬戸内海歴史民俗資料館 1993  
真鍋篤行「弥生・古墳時代の瀬戸内地方の漁業」『瀬戸内海歴史民俗資料館研究紀要』第8号 瀬戸内海歴史民俗資料館 1995  
久保栞子「西庄遺跡における漁撈活動」『西庄遺跡』(財)和歌山県文化財センター 2003  
内田律雄「第1章 第6節 双孔棒状土錘について」『古代日本海の漁撈民(ものが語る歴史17)』(株)同成社 2009
- (8) 久保栞子「西庄遺跡における漁撈活動」『西庄遺跡』(財)和歌山県文化財センター 2003
- (9) 内田律雄「第1章 第6節 双孔棒状土錘について」『古代日本海の漁撈民(ものが語る歴史17)』(株)同成社 2009
- (10) 大塚 武編「福田町誌」福田町誌刊行委員会 1958
- (11) 西川 太「岡山文庫89 両山の漁業」日本文教出版株式会社 1980

## 第3章 南山21号墳の調査

### 第1節 調査に至る経緯と経過

埋蔵文化財センターでは平成17年に吉備郡真備町および浅口郡船穂町が倉敷市に編入合併されたことを受けて、平成18年度から真備町・船穂町内の遺跡分布調査を実施している。平成19年度は真備町の小田川以南の地域を踏査し、160遺跡を確認した。平成20年3月12日、真備町川辺の南山山塊の分布調査を実施していたところ、土砂採取によって崖上に露出した状態の箱式石棺1基を含む古墳群を確認したものである。南山は岡山大学考古学研究室によって発掘調査がおこなわれた天狗山古墳の南に位置している。

標高120m程の南山山頂は、真備町川辺・下二万及び船穂町柳井原の境界が交差しており、尾根が



第30図 南山山塊の古墳分布図 (S=1/5,000)

四方にのびている。2003年に刊行された「岡山県遺跡地図(第5分冊 倉敷地区)」によると、南山の東から東北方向の延びる尾根上に南山東古墳群(4基)、北に延びる尾根上に南山中古墳群(6基)、北西にのびる尾根に南山西古墳群(3基)が存在することになっている。しかし今回の分布調査によって、南山東古墳群(4基)は存在しないことが判明し、南山西古墳群(3基)も確認されたのは2基のみであった。さらに南山中古墳群(6基)についても、現地では標高105m程の尾根頂部を中心に20基以上が確認され、照合が困難な状況であった。このため、南山東古墳群は分布図から抹消、やや南の尾根頂部に位置する1基を南山東古墳とした。南山西古墳群は確認できた2基のみを内出古墳群と呼びなおすこととした。また、南山中古墳群についても、南山古墳群と改名し、番号を新たにふり直した。崖上に露出した箱式石棺は、南山21号墳と命名することとした。

南山21号墳は、古墳群の中でも尾根頂部から北に降った支尾根上に立地する一群に属している。この付近は麓から尾根筋にいたる土砂採取が行われており、発見時、高さ20m程のほぼ垂直に切り立った崖上に石棺が露出した状態であった。その上、石棺の蓋石及び側壁の一部も失われており、このまま放置すれば崩落して失われる危険性が高いと考えられた。また、現状での保存処置も困難であると判断されたため発掘調査を行うこととした。

調査の承諾を得るため、麓にある事業者を訪れたところ、調査について快く承諾を得ることができた。また、該当地の上砂採取自体はかなり以前に行われたもので、今後は進行する予定のないものであること、南山21号墳以外にも周辺には古墳が多数あることから今後土砂採取を再開する場合には埋蔵文化財センターと協議を行うことなどを確認した。

発掘調査は平成20年6月5日から8月5日にかけて実施した。他の業務を行いながらであり、また、崖上という危険な場所での調査であったため通常より時間がかかっている。調査は箱式石棺の構造把握を中心にいき、あわせて墳丘の調査も行った。

#### 調査日誌抄

- 平成20年6月5日 周辺伐採・機材搬入。  
 6月6日 地形測量実施・石棺上面の掘削開始。  
 6月13日 石棺縦軸断面実測。トレンチ1掘削開始。  
 6月18日 石棺上面の写真撮影・実測。  
 6月27日 石棺天非石取り外し。トレンチ1写真撮影。  
 7月1日 トレンチ1実測終了。トレンチ2掘削開始。  
 7月3日 石棺内写真撮影。平面の実測開始。トレンチ2で厨溝確認。  
 7月4日 トレンチ2の断面実測・写真撮影。遺物出土状況撮影後、遺物取り上げ。  
 7月11日 トレンチ3掘削開始。  
 7月18日 トレンチ3断面実測・写真撮影。  
 7月28日 石棺の完掘状況実測・写真撮影。トレンチ配置図作成。  
 8月5日 発掘調査機材を撤収し、調査作業終了。

調査にあたっては地権者である吉田建材株式会社にも、多大な便宜とご協力をいただいた。また、河本 清・澤山秀実・新納 泉・松木武彦の各氏には多くのご助言とご教示をいただいた。記して感謝いたします。

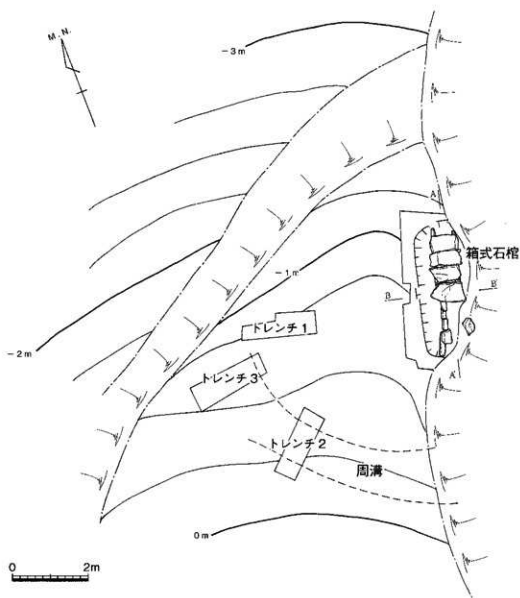


## 第2節 調査の概要

### 1. 遺構

#### (1) 墳丘

古墳の位置する尾根は小田川に向かって北に延びており、東側の谷筋からの土砂採取によって尾根筋に沿う形で削り取られている。箱式石棺は尾根の長軸に沿った形で構築されており、東半分が崖上に露出していた。土砂採取の及んでいない部分については、石棺の北側から西側にかけて高さ1m程の段差があり、開鑿によって周辺が畑となっていた時期があったと考えられる。この段差はおそらく古墳の高まりを利用したものであろう。また、南側は若干の平坦面をへて、さらに南の尾根につながっていくが、明瞭な周溝などは表面観察からは確認できない。南の尾根筋に連なる南山16～20号墳が、古墳としての高まりを明瞭に観察できるのとは対照的である。



第31図 墳丘測量図 (S=1/100)

墳形の確認のために石棺の西から南西側にかけて3か所のトレンチを設定するとともに、土取面の観察もおこなった。

石棺の西方に、石棺主軸に直行する方向で設定したトレンチ1では、地表下70cmほどで、西に向かって傾斜する地山が検出された。地山の上の層からはそれほど古いものとは考えられない遺物が出土し、開壘時の造成土の可能性が高いと考えられた。

トレンチ2はトレンチ1の南方に軸をずらして設定した。地表下50cmほどで地山が検出されたが、ここでは地山を掘り込んだ周溝を検出することができた。周溝は幅約1.2m、地山を20cmほど掘りくぼめたものであった。石棺側に認められるにぶい黄橙色土層はややしまりがあり、古墳の盛土の可能性もある。

トレンチ3はトレンチ2で確認された周溝の続きを検出するために、トレンチ1の西側、やや南よりに設定した。やはり地表下50cm程で地山に達したが、周溝の明確な痕跡を検出できなかった。トレンチの西端で地山面がわずかに立ち上がることから、周溝外周のかたとも考えられるが不明瞭である。黄褐色土層とにぶい黄橙色土層の境界付近からは、銃弾と考えられる鉛玉が出土していることから、黄褐色土層を後世の造成土と考えた。

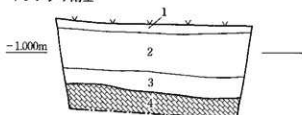
以上のように、トレンチ1・3では明確な墳端を確認できなかったが、土砂採取による崖面とトレンチ2で周溝を確認できた。周溝はトレンチ2では幅約1.2m、土取面では幅約1.5mである。北から下ってきた尾根筋を墳丘と切り離すように掘削され、石棺を中心に半円形の弧を描くように巡っていたと考えられる。このことから南山21号墳は径10m程度の円墳と推定される。

## (2) 箱式石棺

石棺の調査は、墓壇掘りかたを検出することから始めた。現地表面から古い耕作土と考えられる層を30cm程取り除くと、検出面で長さ3.55m、幅約1.8m（推定）の墓壇掘りかたが確認された。掘りかたが切り込んでいる土が盛土なのか自然堆積層なのかは判然としなかったが、山側では地山である岩盤を掘り込んでいる。

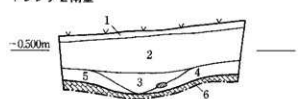
箱式石棺は、尾根と平行にほぼ南北に主軸をおいている。蓋石と東側壁の南半分と南小口壁を失っ

トレンチ1南壁



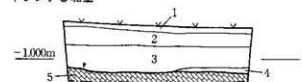
- |              |                  |
|--------------|------------------|
| 1. 黒褐色土（腐植土） | 3. 黄褐色土          |
| 2. にぶい黄色土    | 4. 黄褐色～明赤褐色土（地山） |

トレンチ2南壁



- |              |                 |
|--------------|-----------------|
| 1. 黒褐色土（腐植土） | 4. にぶい黄褐色土      |
| 2. にぶい黄色土    | 5. にぶい黄褐色土（地山?） |
| 3. にぶい黄橙色土   | 6. 灰黄色土（地山）     |

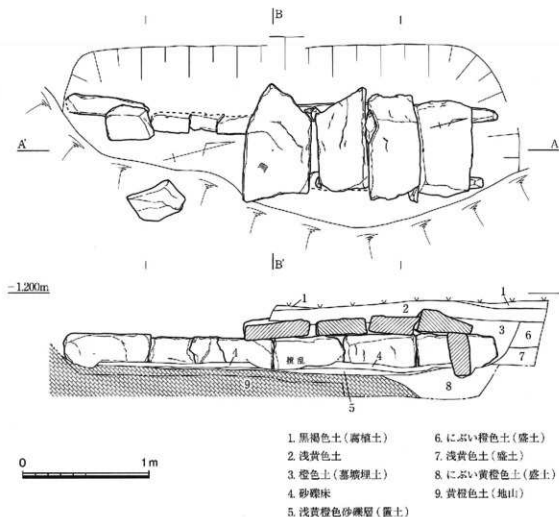
トレンチ3北壁



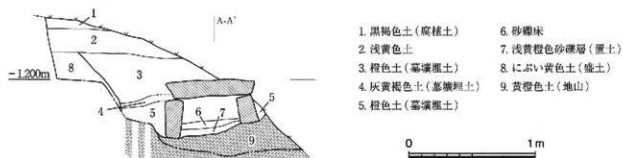
- |              |                |
|--------------|----------------|
| 1. 黒褐色土（腐植土） | 4. 黄褐色土（造成土）   |
| 2. にぶい黄色土    | 5. にぶい黄褐色土（地山） |
| 3. にぶい黄色土    |                |

0 1m

第32図 墳丘トレンチ断面図（S=1/40）



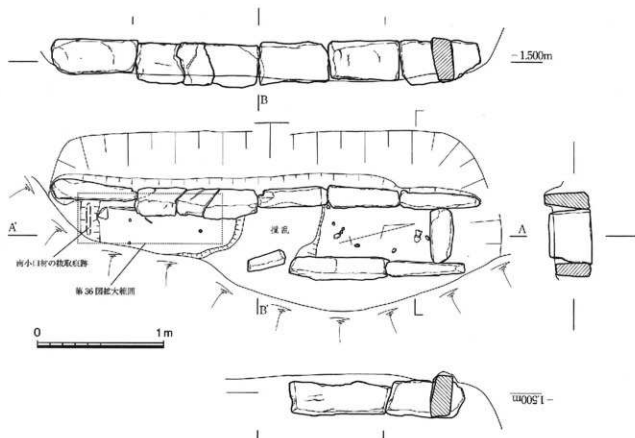
第33図 石棺(蓋石除去前) (S=1/30)



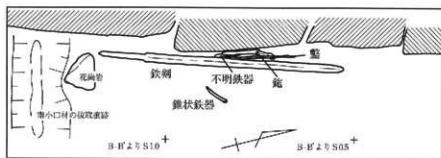
第34図 石棺断面図(蓋石除去前) (S=1/30)

(蓋石より上はB-B'ライン、それより下はB-B'ラインの北0.5mの断面を合成したものである。)

ているが、全長約34m、全幅約0.75mで石材は花崗岩である。石と石の隙間を粘土で目張りするといった所作は認められない。完存する西側壁は5枚の石材が並べられている。南から2枚目は土砂採取時に少し動かされたようで、3個に割れて内側に傾斜している。その他は元位置を保っているようである。一方、東側壁は北の2枚を残して完全に失われている。また、蓋石も北側の4枚は残存して



第35図 石棺（蓋石除去後）（S=1/30）

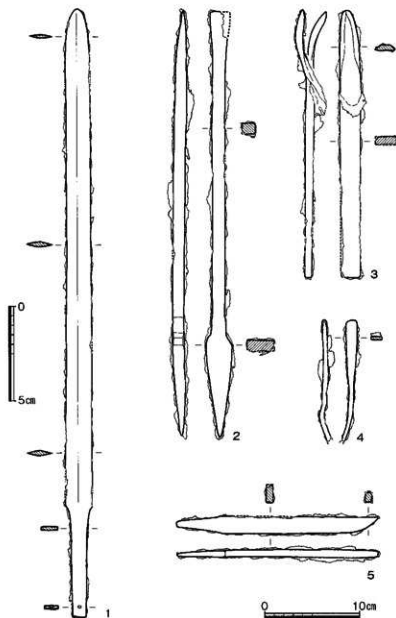


第36図 石棺内遺物出土状況（S=1/10）

いるが、南側は失われており、本来の枚数は不明である。南小口の抜き取り痕などから推定した内法は長さ約2.6m、幅約0.45mである。深さは0.2m前後で、床には砂礫が敷かれている。3～5cm大の円礫もわずかに認められるが、礫床と呼べる程ではない。石材の内面には赤色顔料が塗られていた痕跡が残っており、床面の礫の中にも赤色顔料の付着したものが認められる。南小口付近には、花崗岩の平石が2個置かれており、枕石だった可能性もある。

## 2. 遺物

副葬品としては、棺南半の西側壁に沿った位置で鉄器5点が出土している。内訳は剣1点、鍔1点、鍬状鉄器1点、不明鉄器1点である。鉄剣は切っ先を北にして副葬されており、鉄剣と西側壁の間に鍔・鍬・不明鉄器が置かれていた。鍬状鉄器は鉄剣から8cmほど石室中央よりに離れた位置



第37図 副葬品実測図 (S=1/4・1/2)

はそりがある。また、刃部と茎部との間は銹彫によって変形している。刃部表面には先端で交わる稜線があり、断面は台形状を呈する。裏スキもある。茎部断面は長方形である。木質や布帛痕跡は残っていない。

**錐状鉄器** (第37図4) 残存長6.5cm、茎部の最大幅0.6cm、厚さ0.2cmである。先端にいくほど細くなるが、銹化がひどく断面形状は不明で、ねじられている可能性もある。木質や布帛痕跡は残っていない。

**不明鉄器** (第37図5) 全長10.7cm、茎部は長さ2.4～2.6cm程度と短い。最大幅0.9cm、厚さ0.4cmである。平面形状は刀子状を呈するが、断面が長方形で刀子とは異なる。明瞭な関節を有するので、柄がついていたことは間違いないが、刃部がわからない。先端が刃部であるとしたら、鑿の一種である可能性もある。木質や布帛痕跡は残っていない。

から出土した。

**鉄剣** (第37図1) 全長64.4cm、刃部長52.7cm、刃部幅約3.3cmである。身の断面形は菱形で厚さ0.6cm、明瞭な鑿はなく稜線はやや不明瞭である。茎部は茎尻で幅1.5cm、厚さ0.5cm、関にむかって緩やかに幅を拡げ、関の手前1.5cmほどで急に拡がって刃部につながる。目釘穴は茎尻から1.1cmの位置にある。この目釘穴は茎尻に偏っているの、関に近い位置にもう一つあるかもしれないが肉眼では確認できない。木質や布帛痕跡は残っていない。

**鑿** (第37図2) 全長22.6cmである。刃部は一部欠損しているが、やや拡がると推定され、復元幅1.0cmとなる。中央部断面は一辺0.6～0.7cmの正方形に近い。関節断面は幅1.4cm、厚さ0.7cmの長方形となる。茎尻はややとがっている。

**鏡** (第37図3) 全長14.2cm、刃部最大幅1.0cm、茎部幅1.0～1.1cm、茎部厚0.4～0.5cmである。

刃部と茎部の幅は同じで、刃部に

### 第3節 まとめにかえて

南山21号墳は天狗山古墳の東から南の尾根にかけて群集する小古墳のひとつで、小田川と高梁川の合流点を望む位置に立地している。墳丘は山側にあたる南側を周溝で区画した径10m程度の円墳と考えられる。内部主体は箱式石棺で、内法で長さ約2.6m、幅約0.45mである。石棺材は花崗岩であるが、周辺の地山は花崗岩ではないことから、石材は他で採取されたものが持ち込まれていると考えられる。副葬品としては剣・鏃・鉞・錐状鉄器・不明鉄器が各1点出土しており、玉類などは確認できない。

#### (1) 築造年代

土器や鉄鏡などのように年代決定に有効な遺物が出土していないため、細かい時期の比定は困難であるが、副葬品である鉄製品の型式分類から築造時期の幅を狭めることは可能である。

鉄剣は長さが64.4cm、刃部幅約3.3cmで、関の形状は内側に湾曲するように切れ込み、茎部は茎尻に向かって細くなる。これを池田俊一の分類にあてはめると長剣(ナデ角関直茎)に類別され、4世紀末から5世紀中葉の古墳に副葬された型式とされる<sup>(1)</sup>。

鏃は肩がなく薄手の作りであることから、古瀬清秀の分類のⅡB類に該当する<sup>(2)</sup>。ⅡB類の鏃は4世紀末から5世紀前葉にかけて機能分化し、多彩な形態を持つようになるとされる。南山21号墳の鏃は両部が頸部より広がる特徴的な形状をしており、類例が少ない。あえてあげるなら野中アリス古墳の鉤状異形工具<sup>(3)</sup>の着柄部に類似していると言えようか。

鉞は全長14.2cmの小型品で、刃部長3.0cm、刃部と茎部と同幅で連続する柳葉形であることなどから、古瀬分類の小型鉞Ⅱa類に該当する。小型鉞Ⅱa類は弥生時代から存在し、古墳時代を通じて認められることから、細かい時期は決めがたい。

以上のように南山21号墳の築造年代は、主に鉄剣の年代観から4世紀末から5世紀中葉と考えられる。

#### (2) 箱式石棺

南山21号墳の特徴としては内法長約2.6m、幅約0.45mの細長い箱式石棺があげられる。幅は通常の箱式石棺と同様であるが、長さが際だっている。人骨は全く残っていないが、枕石と考えられる花崗岩の平石2個<sup>(4)</sup>が南小口に接する位置に置かれており、頭位を南にした埋葬が存在したことが推定される。鉄剣などの副葬品は石室西側壁の南部分接して出土しており、この埋葬に伴うものと考えてよいだろう。一方、北小口付近には枕石とするにはかなり小ぶりの花崗岩が2個置かれていた。あえてこれを枕石とし、また南頭位の埋葬遺体を置いてなおあまる空間を考えるなら北向きの埋葬遺体の存在した可能性を推定するしかない。埋葬の順としては副葬品を持つ南頭位のものが最初の埋葬で、北枕の埋葬が続いたと考えるのが自然と思われる。

こうしてみると、あらかじめ2体分の埋葬を予定して細長い石棺を構築したとも考えられるが、長さ2mに満たない箱式石棺においても2体分の人骨が対置式あるいは並列式に埋葬された状態で見つかった例は多く、これのみをもって南山21号墳の長さの要因とするのは困難である。

箱式石棺の幅の差については、清家章が畿内の例から階層差に起因するものであることを指摘して

いる<sup>(5)</sup>。幅50cm未満のものを基準型、50cm以上のものを幅広型として、吉備には幅広型が少なく、それに応じて複数埋葬の場合は対置式となる場合が多いことも指摘されている<sup>(6)</sup>。清家は直接には述べていないが、吉備においては幅広型の下位に位置する基準型が多数を占めるという指摘からはそこに何らかの規制を読み取ることができる。この規制の中で石棺の容積拡大をはかるとしたら、まず思いつくのは長さの増大である。上位の階層からの規制によって、箱式石棺の幅を規定された基準型箱式石棺被葬者層の一部が、規制の中でそこからの離脱をはかった結果が細長い石棺の構築であったのかもしれない。

名称	所在地	墳丘		石室規模		副葬品
		墳形	規模(m)	長(m)	幅(m)	
且山5号	真庭市中塚	方	9	2.8	0.5	無
佐野山	総社市丹波野	方	25	2.72	0.43	鉄剣2・鉄鍬48・鉄製鎧2・鉄製刀子1・良方板車輪甲1・衝角付冑1・碧玉製管玉26・滑石製小玉多数・彫物2
南山21号	倉敷市真備町川辺	円	10	2.6	0.45	鉄剣1・鉄鎧1・鉄製鎧1・鹿矢鉄冑1・不明鉄器1
宮ノ前1号	真庭市一色	円	18.5	2.25	0.26	鉄剣・鉄製鎧1・鉄製刀子3
七ヶ塚1号	笠岡市山ノ上	方	10	2.2	0.5	鉄剣1・鉄刀1・鉄鏃・鉄矛2・鉄鏃1・滑石製勾玉1・滑石製口玉31・須磨管・土師器
楯見4号	新見市西方		11	2.16	0.4	鉄剣1・鉄製刀子3
一箇山5号石棺7	岡山市北区下足守	方	8	2.1	0.5	鉄製鎧1
宇りばら池1号墳	総社市小寺			2.08	0.52	鉄刀1・鉄鏃・鉄製刀子1・滑石製勾玉1・須磨器
楯見7号	新見市西方	方	12	2.08	0.65	無
金子1号	総社市栗	方	8.3	2.0	0.4	鉄鏃1・滑石製紡錘車2・須磨器

表1 岡山県内の内法長2m以上の箱式石棺

表1は岡山県内において内法の長さが2m以上の箱式石棺を取り上げたものである。総社市佐野山古墳のように副葬品が豊富で、一辺25mと規模が大きいものもあれば、真庭市且山5号墳のように小規模な方墳であるうえに副葬品のないものもある。これらに石棺の長さ以外の共通項は認めがたく、前段の考えを積極的に支持する材料はない。今後、事例が増え、さらなる検討が可能となることに期待したい。

### (3) 南山古墳群の位置づけ

高梁川東岸の総社平野で大形の前方後円墳が築かれなくなる5世紀後葉から6世紀中葉にかけて、高梁川西岸の真備地域には天狗山古墳・勝負砂古墳・二万大塚古墳などの前方後円墳が築かれる。南山21号墳を含む南山古墳群は、これらの古墳と密接な関係があると推定される。

松木武彦は天狗山古墳周辺の小墳群について、天狗山古墳築造以前に遡る可能性が高いとし、「天狗山古墳はこれらの小墳群を母胎として生み出された」と指摘していた<sup>(7)</sup>。今回の調査によって、小墳の一つである南山21号墳は5世紀中葉までに築造された可能性が高いことがわかり、天狗山古墳との関係は世代を隔てた時期差であることが判明した。松木の指摘を裏付ける調査例といえる。

ただ、南山21号墳は南山古墳群の中でも、北側の支屋根、それもやや下方に位置する一基に過ぎない。最高所の南山山頂に位置する南山1号墳は直径15m程の円墳でやや規模が大きく、墳頂には大きな盗掘坑が穿たれている。散在する石材から堅穴式石室の存在も推定でき、立地も含めて21号墳とは明確な差が認められる。また、21号墳の副葬品は少量の鉄製品のみで、決して豊富なものとは言えない。笠岡市双塚古墳の母胎となったとされる七ヶ塚1号墳の副葬品(表1参照)と比較しても見劣りする。このことは南山古墳群全体としては天狗山古墳築造につながる母胎として評価されるといっても、そこにはなお階層差を内在していた可能性も捨てきれない。南山古墳群内での階層差

の可能性は今後追求していかなければ課題の一つであろう。

註

- (1) 池河俊一「鉄製武器に関する一考察—古墳時代前半期の刀剣類を中心として—」『古代文化研究』第1号 鳥根集古代文化センター 1993
- (2) 古瀬清秀「4 農耕具」『古墳時代の研究 8 古墳Ⅱ副葬品』雄山閣出版株式会社 1991
- (3) 北野耕平ほか『河内における古墳の調査』大阪大学文学部国史研究室研究報告第一冊 1964
- (4) 枕石と考えられる平石2個のうち東側の1個は調査時の不注意で崖下に転落してしまった。
- (5) 清家 章「畿内周辺における箱式石棺の型式と集団」『古代学研究』152 古代学研究会 2001
- (6) 清家 章「吉備における同積複数埋葬とその親族関係」『古代吉備』第23集 古代吉備研究会 2001
- (7) 松木武彦「第四章 古墳の動感からみた『雄略朝』期の吉備地域」『吉備地域における『雄略朝』期の考古学的研究』岡山大学文学部 2001

表1 引用文献

- 鎌木義昌・間壁忠彦・間壁茂子『長福寺裏山古墳群』1965  
『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査7』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告12 岡山県教育委員会 1976  
『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査9』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告15 岡山県教育委員会 1977  
近藤義郎「佐野山古墳」『総社市史 考古資料編』総社市 1987  
葛原克人「薬金子古墳群」『総社市史 考古資料編』総社市 1987  
高田明人編「すりばち池古墳群」総社市埋蔵文化財発掘調査報告13 総社市教育委員会 1993  
福田正継・浅倉秀昭「旦山遺跡 惣台遺跡 野辺張遺跡 先旦山遺跡 旦山古墳群 奥田古墳 水神ヶ谷遺跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告136 岡山県教育委員会 1999  
神谷正義・河田健司・西田和浩『南坂8号墳・一岡山城跡・一岡山古墳群』岡山市教育委員会 2006



広江・浜遺跡出土遺物観察（一覧）表

1. 土師器

番号	器種	出土位置 層位	法量 (cm)	特徴	胎土	色 調		焼成	残存
						上段：外面/下段：内面			
1	甕製・甕	土器Ⅰ	口径 (220) 器高 -	口縁部内外面はヨコナデ 体部外面はタキメ後ナデ、内面は不明	1.0~2.0	にぶい褐色 褐色	75YR7/4 75YR4/1	良好	1/4
2	壺	土器甕り1	口径 (140) 器高 -	口縁部内外面はヨコナデ 体部内外面はハケメ後ナデ	0.5~1.0	褐色 褐色	75YK7/6 75YR7/6	良好	1/6
3	壺	土器甕り1	口径 (150) 器高 -	口縁部内外面はヨコナデ 体部内外面はハケメ後ナデ	0.2~0.5	褐色 褐色	75YR7/6 75YR2/6	良好	1/2
4	壺	土器甕り1	口径 (118) 器高 -	口縁部内外面はヨコナデ 体部内外面はハケメ後ナデ	0.5~1.0	褐色 にぶい黄褐色	5YR6/6 10YR7/3	良好	1/6
5	高杯	土器甕り1	口径 - 器高 -	脚部外面はハケメ後ナデ 内面はヘラケズリ	1.0~2.0	にぶい黄褐色 褐色	10YR7/4 5YR6/6	良好	1
6	甕	土器甕り1	口径 (210) 器高 -	口縁部外面はヨコナデ、内面はハケメ後ナデ 体部内外面はハケメ後ナデ	0.2~0.5	にぶい褐色 にぶい褐色	75YR5/4 75YR5/4	良好	1/2
7	甕	土器甕り1	口径 (220) 器高 -	口縁部外面はヨコナデ、内面はハケメ後ナデ 体部内面はハケメ後ナデ、外面は不明	0.5~1.0	暗灰黄色 暗灰黄色	2.5Y5/2 2.5Y5/2	良好	1/6
40	甕製・鉢	土器甕り2	口径 10.5 器高 (4.5)	外面はナデで指痕あり 内面はハケメ後ナデで丁寧な仕上げ	0.5~1.0	にぶい褐色 褐色	75YR7/3 5YR6/6	良好	1
41	甕製・鉢	土器甕り2	口径 (10.4) 器高 (4.7)	外面はナデで指痕あり 内面はハケメ後磨おさえ	0.2~0.5	にぶい褐色 にぶい褐色	75YR7/3 75YK7/3	良好	1/4
42	甕製・鉢	土器甕り2	口径 10.8 器高 5.1	内外面ともハケメ後ナデで、口縁部外面と底 部内面に指痕	0.2~0.5	にぶい褐色 にぶい褐色	2.5Y6/3 2.5Y6/3	良好	1
43	甕製・壺	土器甕り2	口径 (11.4) 器高 -	内外面とも口縁部はヨコナデ、体部はハケメ 後ナデで、外面に指痕あり	1.0~2.0	褐色 褐色	75YR7/3 75YR4/3	やや 不良	1/3
44	壺	土器甕り2	口径 (9.5) 器高 -	口縁部は内外面ともヨコナデ 体部は外面がハケメ、内面はハケメ後強い指 ナデ	0.2~0.5	明赤褐色 にぶい褐色	2.5YR5.8 2.5Y6/3	良好	1/4
45	壺	土器甕り2	口径 (13.2) 器高 -	口縁部は内外面ともヨコナデ 体部は不明	0.2~0.5	にぶい黄褐色 褐色	10YR5/3 10YR5/1	やや 不良	1/4
46	壺	土器甕り2	口径 (14.8) 器高 -	口縁部は外面がヨコナデ、内面がナデ 体部は内外面ともハケメ後ナデ	0.2~0.5	にぶい褐色 にぶい褐色	75YR6/4 75YR6/4	良好	1/8
47	甕製・鉢	土器甕り2	口径 (22.8) 器高 -	全体的にハケメ後ナデ 内外面とも凹凸が残る複雑な仕上げ	0.5~1.0	にぶい褐色 灰黄色	5YR6/3 2.5Y6/2	良好	1/6
48	甕製・甕	土器甕り2	口径 (18.8) 器高 -	全体的にハケメ後ナデ 内外面とも凹凸が残る複雑な仕上げ	0.5~1.0	灰黄色	2.5Y7/2	良好	1/6
93	壺	包含層	口径 (12.2) 器高 -	口縁部は内外面ともハケメ後ヨコナデ 体部は外面がハケメ後ナデ、内面は強いハケメ	0.2~0.5	明赤褐色 明赤褐色	5YR5/6 5YR5/6	良好	1/4
94	壺	包含層	口径 (9.7) 器高 -	口縁部は内外面ともヨコナデ 体部は外面がハケメ後ナデ、内面は強いハケメ	0.2~0.5	褐色 褐色	75YR6/6 75YR6/6	良好	1/4
95	甕製・壺	包含層	口径 (12.0) 器高 -	口縁部は内外面ともヨコナデで指痕あり 体部は内外面ともハケメ後ナデ	0.2~0.5	明褐色 にぶい褐色	75YK7/2 75YR6/3	良好	1/6
96	甕製・鉢	包含層	口径 (16.0) 器高 -	全体的にハケメ後ナデ 内外面とも指痕の凹凸が残る複雑な仕上げ	0.2~0.5	にぶい褐色 にぶい褐色	5YR6/4 5YR6/4	良好	1/6
97	高杯	包含層	口径 (19.3) 器高 -	掌域のため不明	0.5~1.0	褐色 褐色	7.5YR6/6 7.5YR6/6	良好	1/4
98	甕製・高杯	包含層	口径 - 器高 11.9	脚部外面はハケメ後ナデで、指痕あり 内面はヘラケズリ	0.5~1.0	明黄褐色 淡黄色	10YR7/6 2.5Y7/3	良好	1
99	甕製・高杯	包含層	口径 - 器高 10.9	脚部外面はハケメ後ナデで指痕あり 内面は成形後未調整	0.5~1.0	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	10YR6/4 10YR6/4	良好	1
100	甕?	包含層	口径 (24.4) 器高 -	外面はハケメ後ナデで指痕あり 内面はハケメ	0.5~1.0	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	10YR6/4 10YR6/4	良好	1/8

## 2. 須臾器

番号	器種	出土位置 層位	法量 (cm)	特徴	轆轤 回転	胎土	色 調		焼成	残存
							上段：外面/下段：内面			
8	蓋杯(蓋)	土器溜り1	口径 14.4 器高 4.7	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5	灰色	7.5Y/6/ 7.5Y/5/1	良好	1
		土器溜り1	口径 (15.4) 器高 4.4	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ			尤	1.0~2.0		
9	蓋杯(蓋)	土器溜り1	口径 14.6 器高 4.8	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5~1.0	灰色	5Y/6/1 5Y/6/1	良好	1
		土器溜り1	口径 14.8 器高 4.9	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ			右	1.0		
11	蓋杯(蓋)	土器溜り1	口径 (14.8) 器高 --	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	-	1.0	黄灰色 黄灰色	2.5Y/6/1 2.5Y/6/1	良好	1/4
		土器溜り1	口径 (13.8) 器高 --	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ			右	0.5~1.0		
14	蓋杯(蓋)	土器溜り1	口径 12.8 器高 --	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	1.0~2.0	灰色	7.5Y/6/1 7.5Y/6/1	良好	1
		土器溜り1	口径 10.6 口径直径 12.7 器高 4.0	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ			左	1.0		
16	蓋	土器溜り1	口径 -- 体部径 (11.0) 器高 --	底部外面は回転ヘラケズリ 体部中央位置はカキメ その他は回転ナデ	左	1.0	灰色 灰色	N6/1 N6/1	良好	1/4
		土器溜り1	口径 (15.8) 器高 --	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ			-	1.0~2.0		
49	蓋杯(蓋)	土器溜り2	口径 (14.6) 器高 --	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5	灰黄色 浅黄色	2.5Y/6/2 2.5Y/7/3	やや 不良	1/2
		土器溜り2	口径 (14.8) 器高 --	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ			-	0.5~1.0		
51	蓋杯(蓋)	土器溜り2	口径 (15.4) 器高 --	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	-	1.0	灰白色 灰白色	5Y7/1 5Y7/2	良好	1/5
		土器溜り2	口径 (13.6) 口径直径 (16.4) 器高 --	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ			右	1.0		
54	蓋杯(身)	土器溜り2	口径 (12.2) 口径直径 (15.3) 器高 --	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5~1.0	灰色 灰色	7.5Y/6/1 7.5Y/6/1	良好	1/2
		土器溜り2	口径 (13.4) 口径直径 (15.7) 器高 5.7	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ			右	1.0		
56	蓋杯(身)	土器溜り2	口径 (12.6) 口径直径 (14.9) 器高 --	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	左	1.0~2.0	灰色 灰色	N6/1 N6/1	良好	1/3
		土器溜り2	口径 (16.4) 口径直径 -- 器高 --	回転ナデ			-	0.2~0.5		
101	蓋杯(蓋)	包含層	口径 (15.0) 器高 (5.1)	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5	オリーブ黄色 灰色	5Y6/3 N6/1	良好	1/6
		包含層	口径 (16.0) 口径器高 4.8	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ			右	1.0		
102	蓋杯(蓋)	包含層	口径 (13.8) 口径器高 --	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	1.0~2.0	灰色	7.5Y4/1 7.5Y/6/1	良好	1/2
		包含層	口径 (12.8) 口径器高 4.5	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ			右	1.0		
103	蓋杯(蓋)	包含層	口径 (13.8) 口径器高 (4.5)	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.2~0.5	灰オリーブ色 灰色	5Y6/2 5Y6/1	良好	1/6
		包含層	口径 12.8 口径器高 4.1	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ			右	0.5~1.0		
105	蓋杯(蓋)	包含層	口径 12.8 口径器高 4.0	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.2~0.5	灰黄色 灰黄色	2.5Y/6/2 2.5Y/6/2	良好	2/3
		包含層	口径 (14.2) 口径直径 (16.7) 器高 --	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ			右	0.2~0.5		

番号	器種	出土位置 層位	測量 (cm)	特 徴	軸輪 回転	胎土	色 調 上段：外面/下段：内面	焼成	残存
109	蓋杯(身)	包含層	口径 (14.2) 底径 (17.0) 器高 -	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	左	0.5	灰青色 25Y6/2 灰黄色 25Y6/2	良好	1/3
110	蓋杯(身)	包含層	口径 (12.8) 底径 (15.2) 器高 4.8	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	左	1.0	灰色 10Y6/1 10Y6/1	良好	1/2
111	蓋杯(身)	包含層	口径 (12.8) 直径 (15.0) 器高 4.0	底部外面はヘラケリ後未窯変 その他は回転ナデ	左	0.5-1.0	灰色 NS/1 灰色 NS/1	良好	1/3
112	高杯	包含層	口径 12.4 脚径 (9.8) 器高 6.9	杯部底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	-	0.5	灰色 5Y6/1 灰オリーブ色 5Y6/2	良好	2/3
113	高杯	包含層	口径 (13.0) 脚径 - 器高 -	回転ナデ	-	0.2-0.3	暗灰黄色 25Y6/2 暗灰黄色 25Y6/2	良好	1/2
114	高杯	包含層	口径 - 脚径 - 器高 -	回転ナデ	-	0.5	にぶい黄色 25Y6/3 にぶい黄色 25Y6/3	良好	-
115	高杯	包含層	口径 (9.0) 脚径 - 器高 -	回転ナデ	-	0.2-0.5	灰オリーブ色 5Y5/3 灰オリーブ色 5Y5/3	良好	1/4
116	高杯	包含層	口径 (7.6) 脚径 - 器高 -	回転ナデ	-	0.5	灰青色 25Y6/2 灰黄色 25Y6/2	良好	-
117	高杯	包含層	口径 (7.2) 脚径 - 器高 -	回転ナデ	-	0.2-0.5	灰色 5Y3/1 灰オリーブ色 5Y5/2	良好	1/5
118	高杯	包含層	口径 - 脚径 - 器高 -	回転ナデ	-	0.2-0.5	灰色 5Y6/1 灰色 5Y6/1	良好	-
119	短須壺	包含層	口径 (8.4) 直径 (14.5) 器高 8.4	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	右	0.5	灰オリーブ色 5Y5/3 灰黄色 25Y6/2	良好	1/2
120	壺	包含層	口径 9.4 底径 1.8 器高 1.8	底部外面は回転ヘラケズリの後ナデ その他は回転ナデ	右	0.2-0.5	灰色 N4/1 黄灰色 25Y5/1	良好	2/3
121	壺	包含層	口径 (12.0) 直径 - 器高 -	回転ナデ	-	0.2-0.5	灰黄色 25Y6/2 灰黄色 25Y6/2	良好	-
122	壺	包含層	口径 (15.2) 直径 - 器高 -	口縁部(踵部を除く)外面カキメ その他回転ナデ	-	0.2-0.5	黄灰色 25Y5/1 灰黄色 25Y5/1	やや 不良	-
123	壺	包含層	口径 (16.8) 直径 - 器高 -	回転ナデ	-	0.5-1.0	にぶい黄色 25Y6/3 黄褐色 25Y5/3	良好	-
124	壺	包含層	口径 (19.4) 直径 - 器高 -	体部外面平行タキ炭カキメ 体部内面同心タキ その他回転ナデ	-	0.5	黄褐色 25Y5/3 黄褐色 25Y5/3	良好	-
125	底部	包含層	口径 (13.2) 直径 - 器高 -	回転ナデ	右	0.5-1.0	灰色 10Y5/1 灰色 10Y5/1	良好	-

### 3. 製塩土器

番号	出土位置 層位	復元 口径 (cm)	タタキの種類	図 整				色 調	
				口縁部		体部(上位)		上段：外面/下段：内面	
				外面	内面	外面	内面		
17	土器層り1	130	平行	タタキ	ナデ・指頭痕	タタキ・ナデ	上具ナデ	灰黄色 褐色色	25Y7/2 7.5YR4/1
18	土器層り1	154	平行	タタキ	ナデ・指頭痕	タタキ・ナデ	工具ナデ	灰黄色 褐色色	25Y7/2 7.5YR4/1
19	土器層り1	142	平行	タタキ	ナデ・指頭痕	ナデ	工具ナデ	灰黄色 黄灰色	25Y5/1 25Y6/1
20	土器層り1	162	平行	タタキ	ナデ・指頭痕	タタキ・ナデ	上具ナデ	にぶい黄褐色	10YR6/3
21	土器層り1	150	平行	タタキ	ナデ・指頭痕	-	工具ナデ	にぶい藍色	7.5YR6/4
22	土器層り1	158	平行	タタキ	工具ナデ・指頭痕	-	工具ナデ	にぶい藍色	7.5YR7/3
23	土器層り1	156	平行	タタキ	工具ナデ・指頭痕	ナデ・指痕	工具ナデ	灰黄色	25Y7/2
24	土器層り1	190	平行	タタキ	工具ナデ・指頭痕	指痕	工具ナデ	褐色 にぶい黄褐色	5YR6/6 10YR6/4
25	土器層り1	218	平行	タタキ	工具ナデ・指頭痕	ナデ・指痕	工具ナデ	褐色黄色	25Y5/2
26	土器層り1	194	平行	タタキ	上具ナデ・指頭痕	タタキ・ナデ	上具ナデ	灰黄色	25Y6/2
27	土器層り1	188	横長格子	タタキ	ナデ・指頭痕	-	上具ナデ	黄褐色 明赤褐色	25Y3/1 5YR5/8
28	土器層り1	184	横長格子	タタキ	工具ナデ・指頭痕	-	工具ナデ	明赤褐色	5YR5/8
29	土器層り1	188	横長格子	タタキ	工具ナデ・指頭痕	-	-	にぶい黄色	25Y6/3
30	土器層り1	178	横長格子	タタキ	工具ナデ・指頭痕	-	-	灰色	5Y4/1
31	土器層り1	180	横長格子	タタキ	工具ナデ・指頭痕	-	工具ナデ	にぶい黄褐色 褐色	10YR6/4 5YR6/6
32	土器層り1	150	横長格子	タタキ	工具ナデ・指頭痕	タタキ・ナデ	上具ナデ	褐色色	25Y7/2
33	土器層り1	138	横長格子に×	タタキ	上具ナデ・指頭痕	刺痕	上具ナデ	灰黄色	25Y7/2
34	土器層り1	192	横長格子に×	タタキ	工具ナデ・指頭痕	タタキ・ナデ	工具ナデ	黄褐色	25Y7/2
35	土器層り1	164	横長格子に×	タタキ	工具ナデ・指頭痕	-	工具ナデ	灰黄色	25Y7/2
36	土器層り1	190	横長格子に×	タタキ	工具ナデ・指頭痕	-	-	にぶい黄褐色	10YR6/3
37	土器層り1	198	なし	ナデ・指頭痕	上具ナデ・指頭痕	ナデ・指頭痕	上具ナデ	褐色	5YR6/6
38	土器層り1	96	平行	タタキ	工具ナデ・指頭痕	タタキ・ナデ	工具ナデ	灰黄色	25Y7/2
39	土器層り1	94	なし	工具ナデ	工具ナデ・指頭痕	工具ナデ	工具ナデ	明赤褐色	5YR5/8
58	土器層り2	160	平行	タタキ	ナデ・指頭痕	ナデ	工具ナデ	にぶい藍色	7.5YR6/4
59	土器層り2	202	平行	タタキ・ナデ	ナデ・指頭痕	ナデ	工具ナデ	褐色色	25Y7/3
60	土器層り2	160	平行	タタキ	ナデ・指頭痕	-	工具ナデ	にぶい褐色 黒褐色	7.5YR6/4 10YR3/1
61	土器層り2	162	平行	タタキ	本調整・指頭痕	ナデ	工具ナデ	にぶい褐色	7.5YR7/4
62	土器層り2	198	平行	タタキ	ナデ・指頭痕	-	工具ナデ	黄褐色	25Y7/3
63	土器層り2	156	平行	タタキ	未調整・指頭痕	-	工具ナデ	褐色	5YR6/8
64	土器層り2	162	平行	タタキ	指頭痕	-	工具ナデ	褐色色	25Y7/3
65	土器層り2	178	平行	タタキ	ナデ・指頭痕	ナデ	工具ナデ	黄褐色	25Y8/3
66	土器層り2	164	平行	タタキ	ナデ・指頭痕	ナデ	工具ナデ	にぶい褐色 黄褐色	7.5YR7/3 25Y7/3
67	土器層り2	150	平行	タタキ	ナデ・指頭痕	-	工具ナデ	黄褐色	25Y7/3
68	土器層り2	168	平行	タタキ	ナデ・指頭痕	ナデ・指痕	工具ナデ	にぶい黄褐色	10YR7/3
69	土器層り2	166	平行	タタキ・ナデ	ナデ・指頭痕	ナデ	工具ナデ	黄褐色 黄灰色	25Y8/3 25Y5/1
70	土器層り2	156	平行	タタキ・ナデ	ナデ・指頭痕	ナデ	タタキ・工具ナデ	にぶい褐色	7.5YR7/4
71	土器層り2	138	なし	ナデ	ナデ・指頭痕	ナデ	工具ナデ	黄褐色	25Y7/3
72	土器層り2	134	なし	ナデ	ナデ・指頭痕	ナデ	工具ナデ	褐色 明赤褐色	5YR6/6 10YR7/6
73	土器層り2	176	なし	ナデ	ナデ・指頭痕	ナデ	工具ナデ	にぶい赤褐色 にぶい褐色	5YR5/4 7.5YR6/4
74	土器層り2	124	なし	ナデ	ナデ・指頭痕	ナデ	工具ナデ	にぶい黄褐色	10YR7/4
75	土器層り2	158	なし	上具ナデ	指頭痕	ナデ	工具ナデ	明赤褐色	10YR7/6
76	土器層り2	140	なし	ナデ	ナデ・指頭痕	ナデ・指痕	上具ナデ	明赤褐色 にぶい黄褐色	5YR5/6 10YR7/4

番号	出土位置 層位	復元 口径 (cm)	タタキの種類	図 解				色 調	
				口縁部		体部(上位)		上段：外面/下段：内面	
				外面	内面	外面	内面		
77	土器溜り2	132	なし	ナデ	ナデ・指頭痕	-	工具ナデ	浅黄色 25Y7/3	
78	土器溜り2	150	なし	ナデ	ナデ・指頭痕	割縁	工具ナデ	浅黄色 25Y7/3 内面一部分褐色 5YR6/6	
79	土器溜り2	172	なし	ナデ	ナデ・指痕	ナデ・指痕	工具ナデ	にぶい黄褐色 10YR7/4	
80	土器溜り2	178	なし	ナデ	ナデ・指痕	ナデ・指痕	工具ナデ	にぶい黄褐色 10YR7/4	
81	土器溜り2	8.6 5.0	平行	タタキ・ナデ	指頭痕	ナデ	指頭痕	にぶい黄褐色 10YR7/4	
82	土器溜り2	8.8 5.9	平行	タタキ	指頭痕	タタキ	指頭痕	浅黄色 25Y7/3	
83	土器溜り2	130 6.9	平行	タタキ	指頭痕	タタキ	指頭痕	にぶい褐色 7.5YR7/4	
126	包含層	13.8	平行	タタキ	ナデ・指頭痕	-	-	にぶい黄褐色 10YR7/3	
127	包含層	15.0	平行	タタキ	ナデ・指頭痕	-	-	浅黄色 25Y7/3	
128	包含層	14.4	平行	タタキ	ナデ・指頭痕	-	工具ナデ	にぶい赤褐色 3YR5/4	
129	包含層	13.8	平行	タタキ・ナデ	ナデ・指頭痕	-	-	にぶい黄褐色 10YR7/3	
130	包含層	15.6	平行	タタキ・ナデ	ナデ・指頭痕	ナデ	工具ナデ	にぶい黄褐色 10YR6/3	
131	包含層	13.6	平行	タタキ	ナデ・指頭痕	ナデ	工具ナデ	褐色 5YR6/8	
132	包含層	17.2	平行	タタキ・ナデ	ナデ・指頭痕	-	工具ナデ	にぶい黄褐色 10YR7/4	
133	包含層	20.2	平行	タタキ	ナデ	ナデ	工具ナデ	にぶい黄褐色 2.5Y6/3	
134	包含層	15.6	平行	タタキ	ナデ・指頭痕	ナデ	工具ナデ	浅黄色 25Y7/3	
135	包含層	16.0	平行	タタキ・ナデ	ナデ・指頭痕	ナデ	工具ナデ	にぶい黄褐色 10YR7/3	
136	包含層	16.0	格子	タタキ	ナデ・指頭痕	-	工具ナデ	にぶい褐色 5YR6/4	
137	包含層	14.0	縦格子	タタキ	ナデ・指頭痕	タタキ・ナデ	工具ナデ	にぶい黄褐色 10YR6/3	
138	包含層	13.8	矢羽根	タタキ	ナデ・指頭痕	-	工具ナデ	にぶい黄褐色 10YR6/4	
139	包含層	12.8	矢羽根	タタキ	ナデ・指頭痕	-	工具ナデ	にぶい褐色 7.5YR6/3	
140	包含層	13.0	山形	タタキ	ナデ・指頭痕	-	工具ナデ	にぶい褐色 7.5YR7/4	
141	包含層	12.8	山形	タタキ	ナデ・指頭痕	-	-	灰黄色 2.5Y7/2	
142	包含層	-	縦斜格子	タタキ	ナデ・指頭痕	-	-	褐色 7.5YR6/6	
143	包含層	-	正格子	タタキ	ナデ・指頭痕	-	-	浅黄色 25Y7/3	
144	包含層	-	平行・格子	タタキ	ナデ・指頭痕	-	工具ナデ	にぶい褐色 7.5YR5/3	
145	包含層	-	矢羽根	タタキ	ナデ・指頭痕	-	工具ナデ	にぶい褐色 7.5YR7/4 灰色 5Y6/1	
146	包含層	11.2	なし	指頭痕	ナデ・指頭痕	-	-	にぶい黄褐色 10YR6/4	
147	包含層	-	なし	-	-	指頭痕	工具ナデ	にぶい黄褐色 10YR6/4	
148	包含層	9.8	平行	タタキ・ナデ	ナデ・指頭痕	ナデ	ナデ	灰褐色 10YR4/1	
149	包含層	12.6	なし	ナデ	ナデ・指頭痕	-	工具ナデ	灰黄色 2.5Y5/1 にぶい黄色 2.5Y6/3	
150	包含層	13.8	なし	ナデ	ナデ・指頭痕	ナデ	工具ナデ	灰黄褐色 10YR5/2 にぶい黄褐色 10YR6/3	

#### 4. 双孔棒状土錘

番号	出土位置・層位	長さ (cm)	幅 (cm)	孔径 (cm)	重さ (g)	色 調
155	包含層(集積)	9.1	1.9	0.7	398	灰白色 5Y7/1
156	包含層(集積)	9.3	1.9	0.7	384	灰白色 5Y7/1
157	包含層(集積)	9.2	2.0	0.7	399	灰白色 5Y7/1
158	包含層(集積)	9.1	2.0	0.7	397	灰白色 7.5Y7/1 黒斑あり
159	包含層(集積)	9.1	2.0	0.7	41.9	灰白色 7.5Y7/1 黒斑あり
160	包含層	9.1	2.0	0.7	397	灰白色 5Y7/1
161	包含層	9.2	1.8	0.7	39.3	灰白色 5Y7/1
162	包含層(集積)	8.9	1.9	0.7	38.4	灰白色 7.5Y7/1 黒斑あり
163	包含層(集積)	8.6	1.9	0.7	39.2	灰白色 5Y7/1
164	包含層(集積)	8.6	2.0	0.7	37.2	灰白色 5Y7/1
165	包含層(集積)	8.8	2.0	0.7	39.8	灰白色 5Y7/1
166	包含層(集積)	8.7	1.8	0.7	32.6	灰白色 7.5Y7/1 黒斑あり
167	包含層(集積)	8.6	1.7	0.7	33.0	灰白色 7.5Y7/1 黒斑あり
168	包含層(集積)	8.6	1.9	0.7	34.8	灰白色 7.5Y7/1 黒斑あり
169	包含層(集積)	8.6	1.8	0.7	31.8	灰白色 7.5Y7/1 黒斑あり
170	包含層(集積)	8.2	1.8	0.7	31.7	灰白色 7.5Y7/1 黒斑あり
171	包含層	8.3	1.7	0.7	33.9	灰白色 5Y7/1
172	包含層	8.5	1.9	0.7	34.7	灰白色 7.5Y7/1 黒斑あり
173	包含層	8.7	2.0	0.7	37.7	灰白色 7.5Y7/1 黒斑あり
174	包含層	8.7	1.7	0.7	32.1	灰白色 5Y7/1
175	包含層(集積)	7.9	1.9	0.7	33.8	灰白色 5Y7/1
176	包含層	8.1	2.0	0.7	37.9	灰白色 5Y7/1
177	包含層	8.7	1.9	0.7	36.0	灰白色 5Y7/1
178	包含層	-	1.6	0.7	-	灰白色 5Y7/1
179	包含層(集積)	8.1	1.7	0.6	31.5	灰色 5Y6/1
180	包含層(集積)	8.9	2.0	0.7	36.6	灰白色 5Y7/1
181	包含層	10.3	1.7	0.7	35.6	灰黄色 2.5Y6/2
182	包含層	9.1	1.7	0.6	31.0	灰白色 2.5Y7/1
183	包含層	8.7	1.7	0.6	33.7	灰色 7.5Y5/1 黒斑あり
184	包含層	7.3	1.6	0.6	24.7	にぶい黄褐色 10YR6/3 黒斑あり
185	包含層	-	1.4	0.5	-	にぶい黄褐色 10YR6/3
186	包含層	-	1.2	0.6	-	にぶい黄褐色 10YR5/3
187	包含層	-	1.5	0.6	-	にぶい灰色 2.5YR6/3
188	包含層	-	1.8	0.5	-	にぶい黄色 2.5YR6/3
189	包含層	-	1.2	0.4	-	にぶい黄色 2.5YR6/3
190	包含層	-	1.3	0.5	-	にぶい黄褐色 10YR6/3

#### 5. 石器

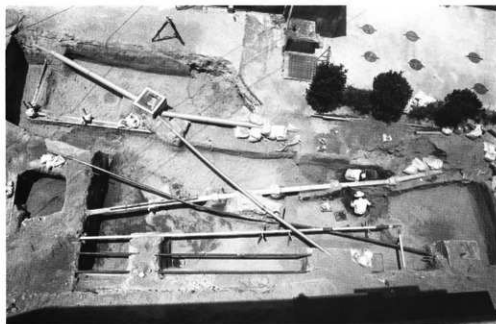
番号	出土層位	器 種	石 材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)
S 1	包含層	石鏃(凹基)	サヌカイト	2.06	(1.08)	0.29	0.5
S 2	包含層	石鏃(平基)	サヌカイト	2.42	1.25	0.33	1.0
S 3	包含層	石鏃(平基)	サヌカイト	1.42	(1.16)	0.22	0.3
S 4	包含層	石鏃(平基)	サヌカイト	2.09	1.40	0.39	0.6
S 5	包含層	石鏃(平基)	サヌカイト	(3.40)	(1.79)	0.48	2.7
-	包含層	加工痕のある剥片	サヌカイト	2.78	4.79	0.66	8.6

# 圖 版

1. 調査地遠景(中央山裾)



2. 調査区全景(東から)



3. カマド支脚残存状況  
(南から)







1. カマド支脚残存状況  
(西から)



2. カマド完掘状況  
(西から)



3. カマド完掘状況  
(南から)

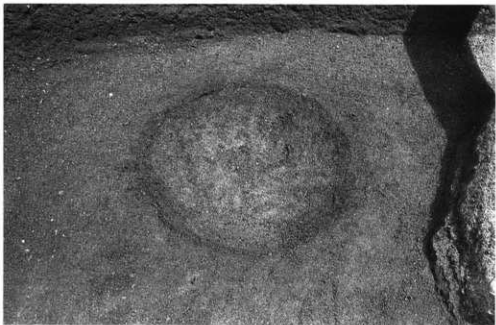
1. 土壇1 (南から)



2. 土壇2 (西から)



3. 土壇3 (南から)





1. 土坑4(左)・土坑5  
(北から)



2. 土坑6(南から)



3. 土器溜り1  
須恵器出土状況

1. 土器溜り1  
獣骨出土状況



2. 土器溜り2  
遺物出土状況(南から)



3. 土器溜り2  
遺物出土状況(西から)





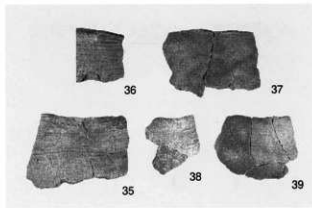
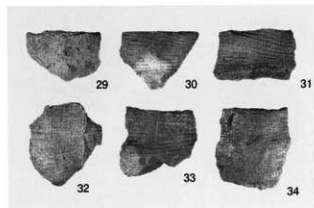
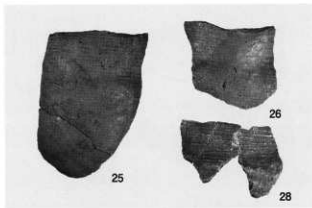
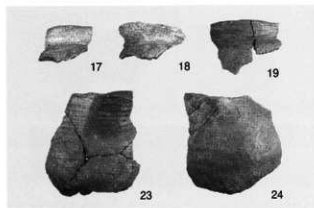
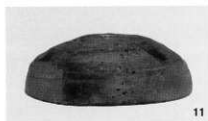
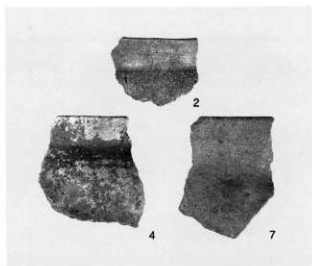
1. 包含層 土錘出土状況



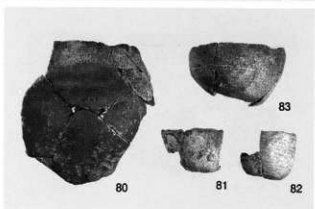
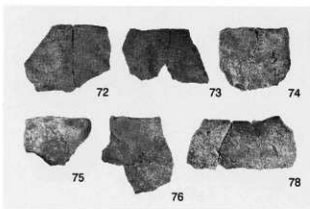
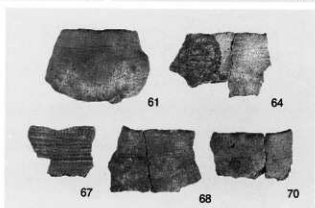
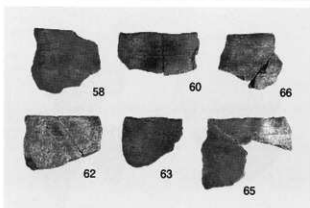
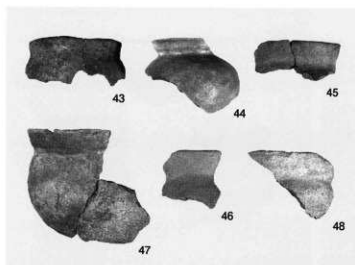
2. 炉跡検出状況

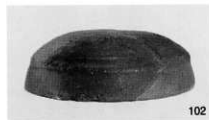
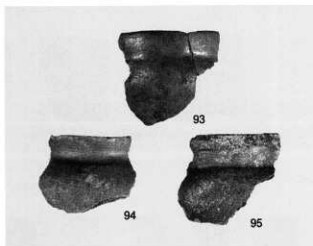
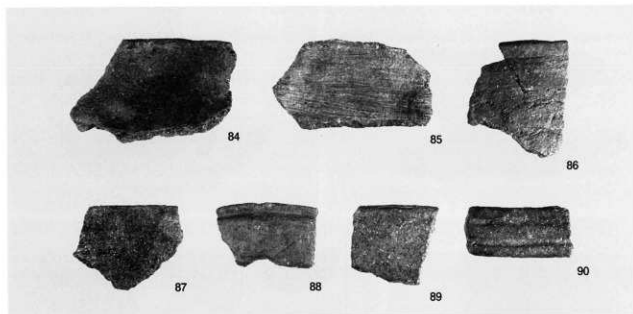


3. 作業風景

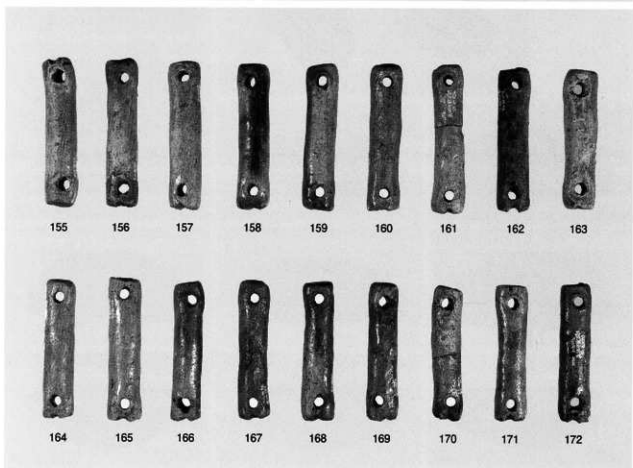
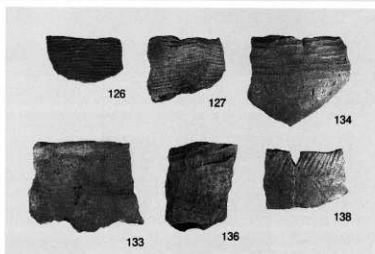


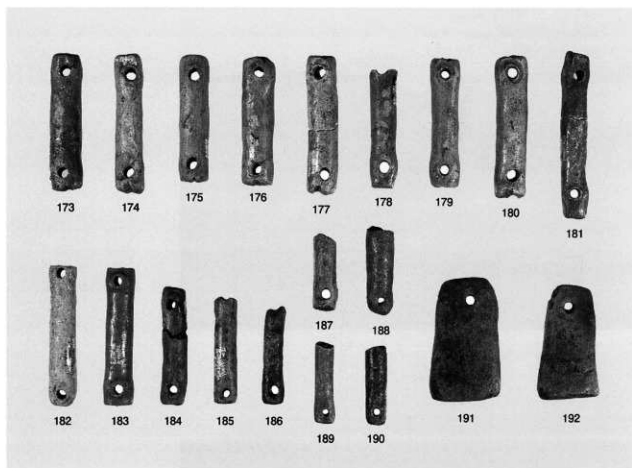
図版8 広江・浜遺跡 出土遺物(2)













1. 発見時の状況(南から)



2. 古墳遠景(東から)



3. 墓室中軸断面

1. 石棺の蓋石



2. 箱式石棺全景(南から)



3. 箱式石棺全景(北から)





1. 箱式石棺全景(西から)



2. 副葬品出土状況



3. 石棺床断面  
(北小口付近)

1. 石棺床断面  
(南小口付近)

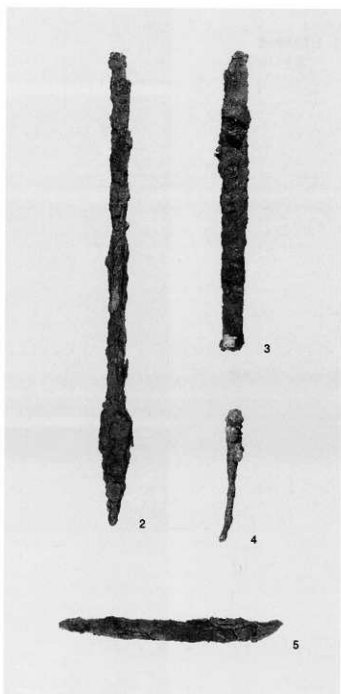
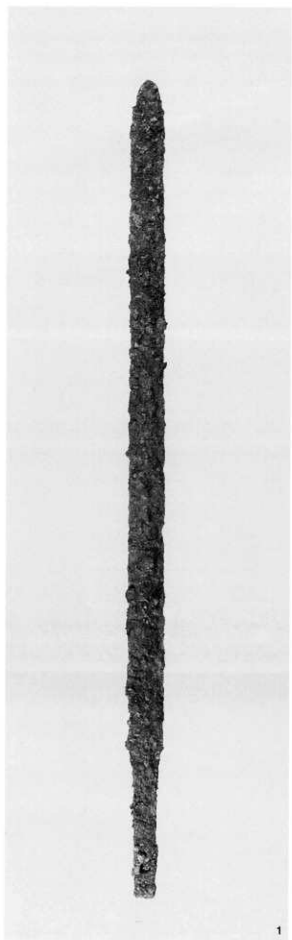


2. トレンチ2南壁



3. トレンチ3北壁





## 報告書抄録

ふりがな	ひろえ・はまいせき みなみやまにじゅういちごうふん							
書名	広江・浜遺跡 南山21号墳							
副書名								
巻次								
シリーズ名	倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	第14集							
編著者名	鍵谷守秀・小野雅明・藤原好二							
編集機関	倉敷埋蔵文化財センター							
所在地	〒712-8046 岡山県倉敷市福出町古新田940番地 Tel.086-454-0600							
発行年月日	平成23年3月31日							
所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
広江・浜遺跡	岡山県倉敷市 広江一丁目	33202	05-001	34° 31' 12"	133° 46' 29"	19900416 ~ 19900531	60 m <sup>2</sup>	校舎増築工事
南山21号墳	岡山県倉敷市 真備町川辺	33202		34° 37' 29"	133° 43' 23"	20080605 ~ 20080805	10 m <sup>2</sup>	土砂採取工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
広江・浜遺跡	集落跡・ 製塩	縄文～中世	カマド付き建物 炉跡・土器溜り 土壁		製塩土器・土師器 須恵器・土錘			
南山21号墳	古墳	古墳時代	箱式石棺		鉄剣・鑿・鉈			



#### 印刷仕様

紙 質	表紙：サンマット160kg (PP張り) 本文：書籍用紙65kg 図版：マットアート110kg
編 集	Mac OS 10.5.8 Adobe InDesign CS3 Adobe Photoshop CS3
使用フォント	モリサワ OpenType フォント (リュウミン L-KL・中ゴシック BBB・太ミン A101・ 太ゴ B101・見出ゴ MB31)
製 本	無線綴じ

倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告 第14集  
**広江・浜遺跡 南山21号墳**

平成23年3月31日印刷発行

発 行 倉敷市教育委員会

編 集 倉敷埋蔵文化財センター

〒712-8046 倉敷市福田町古新田940番地  
TEL086-454-0600

The Excavation Report  
Of  
Hiroe · hama Site Minamiyama No.21 Tumulus

---

Volume 14

Kurashiki  
Archaeological Center

---

March 2011